「双円性海塔」を主尊とする板碑——宮城県域を中心に——

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 則和 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000207

「双円性海塔」を主尊とする板碑

――宮城県域を中心に――

田　中　則　和

はじめに

2023年１月に開催された石巻市博物館第２回企画展「石巻の板碑―調査の記録をたどる―」は、拓本、実測図などの展示にも先人研究者の問題意識を持った眼差しを観ることができた優れた展示であった[1]。また、梵字の組合せにより五輪塔を表現した、いわゆる「双円性海塔」[2]を主尊とする板碑（以下、「双円性海塔板碑」）の造形は心に食い込んでくるものがあった。そこで、改めて実物を観察し、３Ｄ記録[3]の作成を試みた。残念なことに消失したり、立ち入り禁止の板碑もあったが、実物からは「双円性海塔」の彫りの巧みさやデザイン力を感じた。さらに福岡・群馬・福島・宮城県と広域に分布するのにも関わらず、なぜ、14基と少数なのか、また、その内の９基も宮城県に分布するのはなぜか。これらを探る手がかりを得たいとも思った。そこで、標記のテーマとしたしだいである。

１　概要

宮城県では双円性海塔板碑すなわち、「梵字大日五字真言」[4]により造形した五輪塔を主尊とする板碑は14世紀から15世紀前半にかけて９基確認した。双円性海塔板碑として確実なものは石巻市に５基と集中し、仙台市に２基、栗原市に１基、登米市に１基所在する[5]。

宮城県における研究史として代表的なものは佐藤信行氏の調査・研究である。「梵字変形五輪塔所刻の板碑」（2017年）において類例を集

１図　宮城県域の双円性海塔板碑の分布

成し、服部清道氏の塔形を刻む板碑一種第三類に相当するとした。また、伝播ルートを「群馬・大類を初発とし、福島・関根を経て宮城県を北上した」とし、その原因を「密教・浄土系の同居」を特徴とする武蔵地域外縁部の「宗教的共通性」とした[6]。さらに、「線刻五輪塔板碑」（2020年）では宮城県内の線刻五輪塔板碑を二大別し、双円性海塔板碑を「梵字を五輪塔形にアレンジしたもの」としてⅡ群ａ類に位置付けた[7]。近年では、菊地大樹氏が山内首藤氏の北遷地である石巻市の吉野・鹿又の開発を板碑から探る中で、双円性海塔を主尊とする板碑を取り上げ、領主の招聘による宗教指導推進の結果と推察した[8]。

２　板碑

調査の手法は、強力な懐中電灯を当てて観察し、Agisoft Metashape 及び CloudCompare による三次元記録の作成による。掲載画像は３Ｄ画像、３Ｄソリッド（SO）画像を主とし、展開図を基本とする。

⑴　諏訪神社№３延慶３（1310）年銘板碑[9]

仙台市太白区郡山５丁目13－８に所在する。諏訪神社境内のコンクリート基礎の上に立つ。宮城県最古の双円性海塔板碑である。『仙台市史　特別編５　板碑』（仙台市　1998年）掲載の実測図参照。宮城県神社庁神社検索によると、由緒の項に「当時延慶３年（1309年、鎌倉時代）旧境内社殿後方に「諏訪の碑」と称する碑あり。」「長町駅操車場に指定せられ買収され大正13年（1924年）（中略）現在地に移築遷座す。」とあり、板碑及び神社の移転の経緯が分かる。また、諏訪神社は「第70代後冷泉天皇の天喜４年（1056年）陸奥守鎮府将軍源頼義公が安倍頼時を征し、地方人民風俗を見聞し、人民を治める為、衣食住の守護の神を信仰せしむと其の神恩に報じ奉る稲荷の大神と祀るという。その後第103代後土御門天皇（1469～1486年）の文明年間に名取郡郡山村北目城主粟野助五郎大膳亮忠重の子右京之助、遠江守国定祀堂改造す。又、永禄年間第106代正親天皇（1554～1569年）北目城主粟野多門国重社殿を再建したと伝える。」とあり、中世の領主の保護を伝える。

石材は安山岩。地上高140.0cm、幅59.5cm、厚さ23.0cm。頭部の頂部から右上欠損。碑面左端側面中部の一部欠損。頭部形態は残存部より三角形と推定。頭部左側に剥離加工痕残存。体部形態は両側直立。碑面は平滑であり、自然面を研磨しているようだが全体に磨滅が進んでおり断定はできない。右側辺は自然面。左側辺は

	西暦	紀年銘	所在	主尊を構成する真言・種子	荘厳	偈　真言	願文	法量	石材	主要文献
1	1310	延慶３年12月中旬	仙台市・諏訪神社	アバランカンケン（大日法身真言）	なし	なし	「延慶三年庚戌臘月中旬面々各々敬白」	140. 60. 23	安山岩	仙台市史・板碑
2	1312	正和元年４月26日	石巻市・作楽神社	アバラカキャ（大日如来真言・五大の種子）	蓮座	なし	「為仏眼幽儀■　■／于時正和元年四月」「二十／六日」	167. 27. 22	粘板岩	佐藤雄一　河南町の板碑
3	1326 -29	嘉暦	仙台市・古峯神社	アビラウンケン（大日報身真言）	蓮座	なし	「嘉暦■■／三十五」	73. 54. 7	安山岩	仙台市史・板碑
4	1331	元徳３年	石巻市・高福寺	アビラウンケン（大日報身真言）	なし	なし	「元徳三年七月日／右志者為過去善尼相／當于一百ケ日忌辰也」	170. 39. 5	粘板岩	佐藤雄一　河南町の板碑
5	1343	興国４年	石巻市・長泉院	アビラウンケン（大日報身真言）	天蓋・瓔珞蓮座	光明遍照／十方世界／念佛衆生／摂取不捨	「右志者為過去宗仏一百ヶ日／興国四年臘月日／乃至等流彼是含■■報？仏恩」「臘」の右に「癸」、左に（「未」）」	247. 45. 17	粘板岩	勝倉元吉郎他　北上川下流域のいしぶみ
6	14世紀		石巻市・堀ノ内	アビラウンケン（大日報身真言）	なし	なし	なし	42. 36. 2	粘板岩	石巻市博物館Twitter
7	1413	応永20年	石巻市・多福院	アビラウンケン（大日報身真言）	蓮座	光明真言	「右志趣者　応永二十年癸巳六月十四日　孝子敬白」「奉為喜継大禅定尼三十三廻忌辰出離」「生死証大菩提乃至法界平等利益故也」	283. 66. 15	粘板岩	石巻の歴史・８
8	1416	応永23年	登米市・桜岡	イ　アビラウンケン（大日報身真言）	なし	なし	「応永念三年丙申八月十八日」「施主／敬白」「右此塔婆造立志」「為宇道文公知客」	不明	不明	佐藤信行・木村一郎　米山町板碑調査報告
9	不明		栗原市・不動寺跡	アバランカンケン（大日法身真言）	不明	不明	不明	71. 30. 7	粘板岩	高清水町史　板碑編

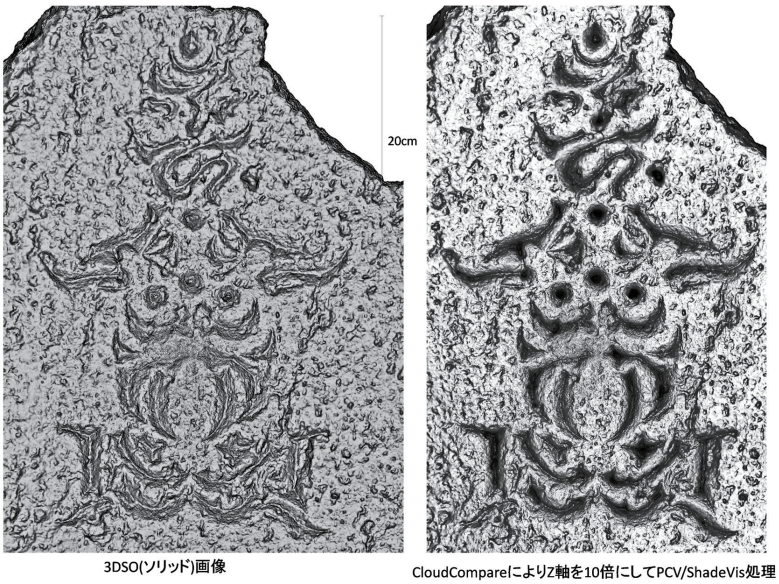
２図　宮城県域の双円性海塔板碑表

割り加工。裏面は割り面か。

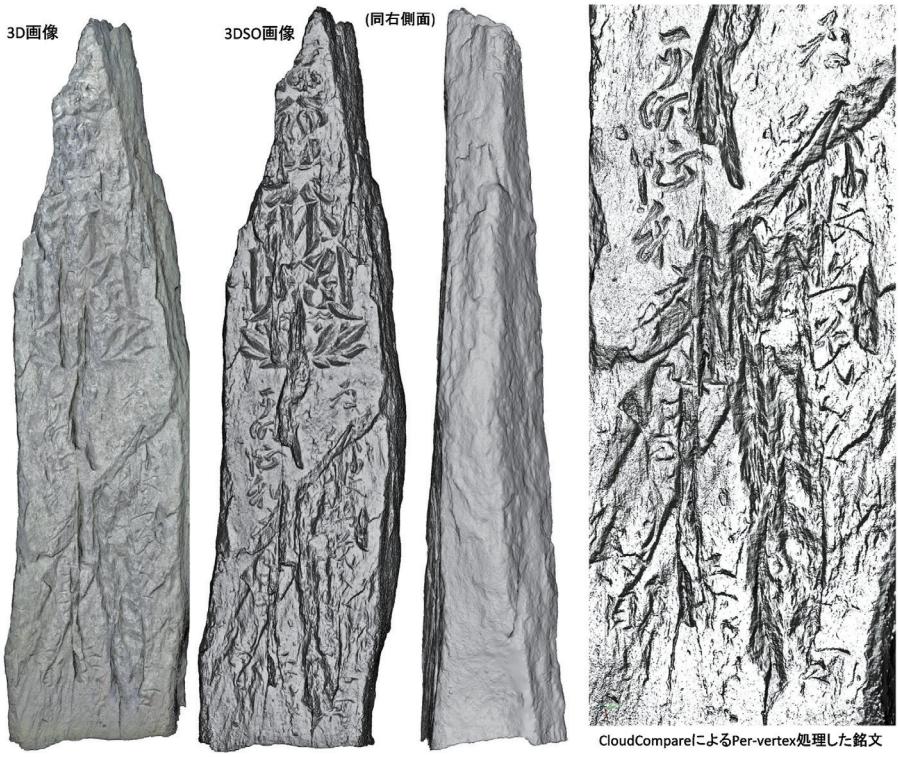
主尊は梵字で下からア・バン・ラン・カン・ケン（大日法身真言）を薬研彫して五輪塔を造形している。磨滅により形態は不明瞭なところがあり、龍泉Ⅲ氏の「石碑の文字を読みたい！」[10]に従いCloudCompareによりＺ軸を10倍にしてPCV/ShadeVis処理をするなどして検討・掲載した。

地輪は右側をアの正字、左側を鏡文字にして向かい合わせにして、いずれも高さをやや低く

３図　諏訪神社板碑No.３　展開図



４図　諏訪神社板碑No.３　主尊



５図　作楽神社板碑№３

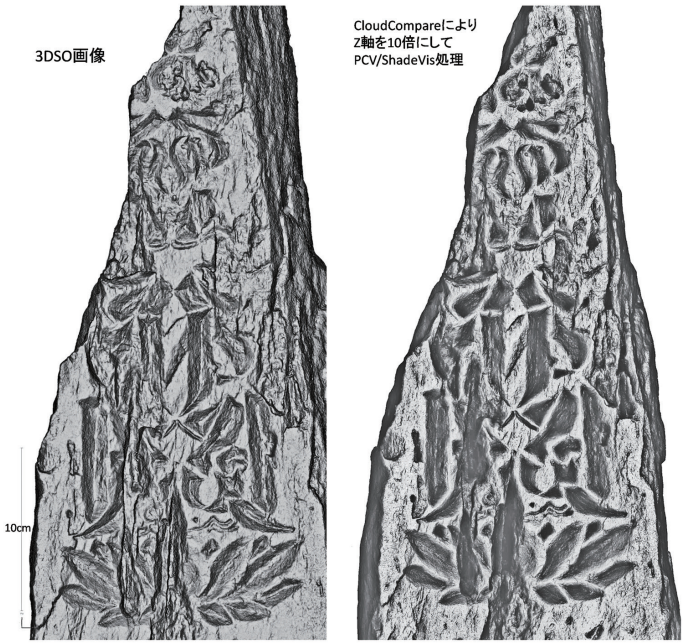
押しつぶしたような形態。水輪は左側を仰月点付きのバンの正字、右側を鏡文字として背中合わせにして、バンの三画目を水輪の弧状に合わせ変形する。両バンの中心線頂部に空点よりやや大きな円孔が刻まれ、五輪塔の中心点となる。正に二つのバンが合体して円形を成し、「双円性海」の思想を具現している。火輪は右側をランの正字、左側を鏡文字にして火輪の形態に傾けて向かい合わせにして、両端は反り上がる形態を示す。空点は、両字の屋根ラインの中央に共通した一点である　風輪のカンは正字一字で、一画目の両端を開いて風輪の形態をなぞっている。空輪のケンは正字一字で、頂部の宝珠と全体もその相似形的に整えられている。

五輪塔の高さ41.7cm、最大幅は火輪で24.9cm、深さはラン字で3.2mm、ア字で6.8mmを計る。

年号月日は延慶３（1310）年12月中旬。願文は五輪塔の下、中央に「延慶三年庚戌臘月中旬面々各々」、その下に右左に分けて「敬白」と刻む。「面々各々」による供養塔とみられる。石黒伸一朗氏は12月中に行わわれる懺悔滅罪を祈願する仏名会に際しての結衆板碑とする[11]。なお、左右に文字状痕跡が認められたが、磨滅が顕著で読解には至らなかった。なお、「面々各々」という用語の鎌倉末期の近隣の例として川内板碑群１号碑（高さ3.9m）の正安４（1302）年銘カンマーン種子板碑には「四十余人講衆面々各々所志聖霊往生極楽」や別時念仏結衆板碑とみられる岩切・洞ノ口Ｂ板碑群４号碑があり[12]結衆表現の一つと考えられる。

⑵　作楽神社・道的（どうてき）板碑群№3正和元（1312）年銘板碑[13]

石巻市新道下作楽神社境内に所在する。河南町教育委員会の説明板によると「道的周辺には三軒谷地に通じる三叉路脇に「オカネトウバ」と言われていた場所があり」耕地整理により板碑が移された由であり、18基確認した。その推



６図　作楽神社板碑№３　主尊

定地は現位置より東に約300mの自然堤防東端付近とされる[14]。約600m北方の同じ自然堤防には鎌倉末期を主体とする矢袋屋敷板碑群（６基)、さらに光明寺(最古は弘安８年銘･11基)、土手外（３基）と三弁宝珠の高さ2.8mなど大型板碑を含む板碑群が北上川沿いの自然堤防に連なっており（30図参照)、微高地上に領主の拠点が13世紀後半には形成されたとされる[15]。

石材は粘板岩。地上高167cm、幅27cm、厚さ22cm。頭部左側欠損。中央部に亀裂。下部は破損、剥落が多い。頭部形態は残存部から三角形か。体部形態はやや湾曲しつつ並行直立。碑面は割り面。右側辺は割り面。左側辺は剥離加工。裏面は割り面。割り、剥離加工により成形、整形。

主尊は梵字で上からキャ・カ・ラ・バ・ア（大日五大種子)を薬研彫して五輪塔を造形し、蓮座で荘厳する。地輪は右側をアの正字、左側を鏡文字（破損）として向かい合わせとする。水輪は左側をバの正字、右側をバの鏡文字として背中合わせとする。火輪は右側をラの正字、左側を鏡文字として向かい合わせとし、火輪の形態に傾けて、両端は反り上がる形態を示しているようであるが、梵字下半の剥落のため形態は不明瞭である。風輪は左側をカの正字、右側を鏡文字として背中合わせとする。空輪はキャ一字のようであるが全体の剥落・磨滅のため不明瞭である。五輪塔の高さ44.3cm、幅19.3cm（残存最大値)、深さバ字3.9～6.4mm。

年号月日は正和元（1312）年４月26日。願文は「為仏眼幽儀■　■／于時正和元（1312）年四月」(／は改行記号　以下同じ)「二十／六日」とあり仏眼の追善供養塔とみられる。なお、読解にあたっては石巻市博物館企画展「石巻の板碑―調査の記録をたどる―」(2023）を参考にし、菊地大樹氏のご教示を得た。

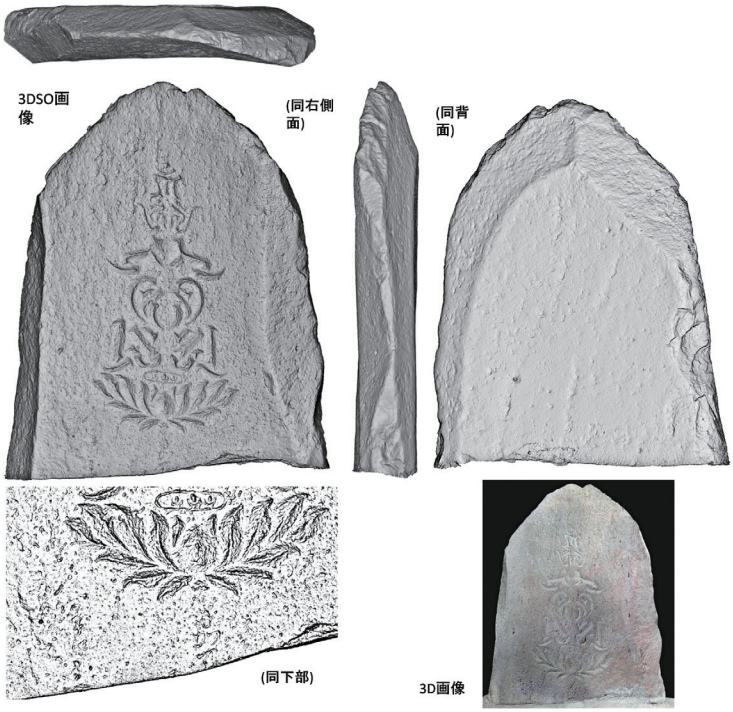
⑶　古峯神社嘉暦銘板碑

仙台市太白区東郡山の某家の氏神としてコンクリートに固定され祀られている。『仙台市史　板碑』によれば元は「安斎沼」のそばの自然堤防にあり、1979年の道路拡張工事に伴い現状の小祠に祀られた（所在名「北目宅地」)。また、北目城域の北東守護の役割を担うとの伝承があ

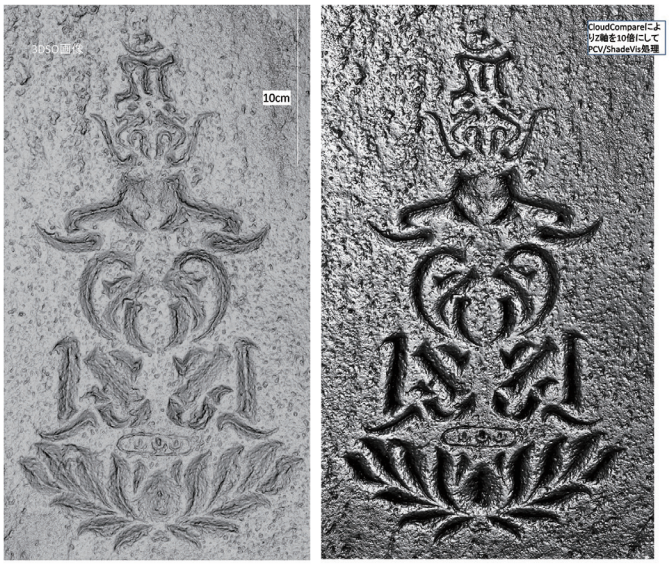
る。北目城は戦国期粟野氏の居城として知られ、『仙台市史　地域誌』では当地は侍屋敷推定地の東端付近にあたる。名取郡に含まれ鎌倉時代は北条氏領である[16]。

石材は安山岩。地上高72.5cm、幅53.6cm、厚さ6.5cm。完形。頭部形態はアーチ形。頭部は剥離加工整形。体部形態は両側が直線的にすぼまる。碑面は平滑であり、自然面を研磨している。右側辺は剥離加工整形。左側辺も剥離加工整形。裏面は割り面か。全体に剥離加工を駆使して塔形を整えている。

主尊は梵字で下からア・ビ・ラ・ウン・ケン（大日報身真言）を薬研彫して五輪塔を造形し、蓮座に荘厳されている。地輪は右側をアの正字、左側を鏡文字にして向かい合わせにしている。水輪は左側をビの正字、右側を鏡文字として背中合わせにしている。火輪は右側をラの正字、左側を鏡文字にして火輪の形態に傾けて向かい合わせにして、両端は反り上がる形態を示す。風輪のウンは左側が正字で、右側が鏡文字となり背中合わせになっている。空輪のケンは仰月点を持つ正字一字であり、「アバランカンケン」組合せ塔である高崎市宿大類事例のデフォルメにやや近似している。五輪塔の高さ36.1cm、最大幅は地輪で21.4cm、ア・ビ・ラ字は幅が広く深さも3.8～5.1mmと深い。ウン・ケン字は細く、1.2～2.8mmと浅い。「アビラウンケン」の組合せの双円性海塔例としては宮城県最古である。



７図　古峯神社板碑　展開図



８図　古峯神社板碑　主尊

９図　高福寺奥の院板碑№.２

年号月日は嘉暦（1326－29）年。願文は主尊の下に「嘉暦」、蓮座左端の下方に「■■三」と見えるが、その下は『仙台市史』は「十五」、すなわち「三十五」と読む。石黒伸一朗氏は結衆した人数とみて、諏訪神社№.３と同じく仏名会に際しての造立と推定する[17]。『仙台市史』調査後、コンクリートのかさ上げがなされたようで該当箇所の検討はできなかった。近隣碑の銘文配置例から結衆とみておきたい。

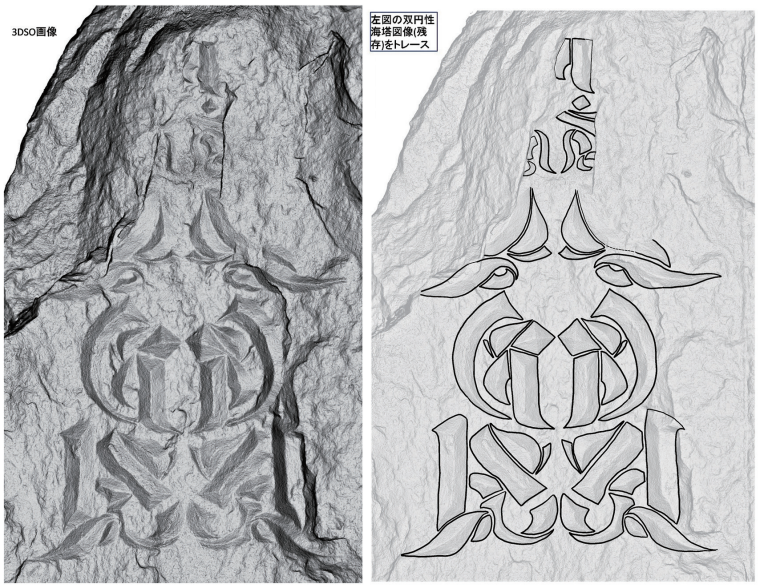
⑷　高福寺奥の院板碑群№.２元徳３（1331）年銘板碑

石巻市北村高寺に所在する高福寺（天文15年に天台宗から曹洞宗に改宗）旧本堂の跡地で墓地に慈母観音が立ち、「奥の院」と称されている。深谷保長江氏惣領クラスの五七日の追善供養塔として著名な「鎌倉権五郎五代後葉」弘安元（1278）年銘阿弥陀三尊種子板碑[18]の故地と推定される「高福寺奥の院板碑群」（仮称）６基[19]の内の１基であり、背後の新庄館（駒立館）跡の東側舌状張り出しの緩斜面の最も高所に倒れている。その上方に平場があり、そこが板碑群の元位置の可能性がある。板碑群のほとんどが江戸期に墓碑に転用され、斜面一帯に散在する。新庄館跡は河南町教育委員会による説明板によると「延暦・大同年間（西暦780～806年）坂上田村麻呂が箟岳丸及びここに住む鬼神大納言征討の折に駒を停め形勢を展望した所で、後に新城を築き敵に備えたことから「新城館」または「駒立館」と伝えられる。」とのことである。高福寺は太平洋を一望する旭山（174m）の南麓に位置し、大同二（807）年中、坂上田村麻

呂創建伝承を持つ天台宗寺院であり[20]、新城館の伝承もその反映とみられる。『石巻の歴史　第８巻』（石巻市　1992）によれば、多福院板碑群（石巻市）中には「高福前住」銘を持つ板碑が２基ある。№26応安７（1374）年銘「高福前住恵海律師一周忌」と№60応永10（1403）年銘「高福前住励公相当三十三年」の追善供養塔である。同板碑群には他にも応永７（1400）年「篦峯寺前住思礼和尚」銘板碑があり、篦峯寺は前述の伝説とも関連して高福寺と同じ大同２年（807年）坂上田村麻呂創建とされる。さらに多福院の応永４（1397）年「牧山寺伝灯大阿闍梨」銘逆修塔、永享２（1430）年「牧山別当禅良阿闍梨」銘板碑の「牧山」は湊牧山の魔鬼山寺とみられ[21]、その由来は坂上田村麻呂による大嶽丸の妻？である魔鬼女を討ち取り魔鬼山寺に葬り、牧山観音を勧請したという（牧山の観音堂は延暦17（798）年創建とされる[22]）。板碑から窺われる坂上田村麻呂観音菩薩勧請伝承で結ばれる三寺院のネットワークの存在が知られ、多福院一帯の前身寺院[23]はこれらと結ばれた聖地的存在であった可能性がある[24]。

石材は粘板岩。長さ170cm、幅39cm、厚さ５cm。頭部左欠損。碑面先端部剥落。頭部形態は欠損のため不明だが尖頭形か。体部形態は両側直立。碑面は割り面。右側辺、左側辺とも剥離加工整形。裏面は元禄12（1699）年銘墓碑に転用されている。

碑面は長方形線刻（上端欠損）の中に上部に主尊の双円性海塔、下部に願文を配する。主尊は梵字で下からア・ビ・ラ・ウン・ケン（大日報身真言）を薬研彫して五輪塔を造形している。地輪は右側をアの正字、左側を鏡文字にして向かい合わせにしている。水輪は左側をビの正字、右側を鏡文字として背中合わせにしている。火輪は右側をラの正字、左側を鏡文字にして火輪の形態に傾けて向かい合わせにして両端水平となる形態を示す。特徴的な形象として四画目の尖頭の下、下のビのイ点との間に上下瞼のように造形し両眼状の形象をしていることで、後述するように地域的、時期的特徴を示している。風輪のウンは左側が正字で、右側が鏡文字となり背中合わせとしているが剥落のために不明瞭である。鏡文字には仰月点が認められる。空輪のケンは正字一字であり、三・四画目以外は剥落している。五輪塔の残存する高さ36.1cm、最大幅は地輪で22.7cmである。ただし、火輪の軒端の左端は破損しており、確認長は



10図　高福寺奥の院板碑№２　主尊

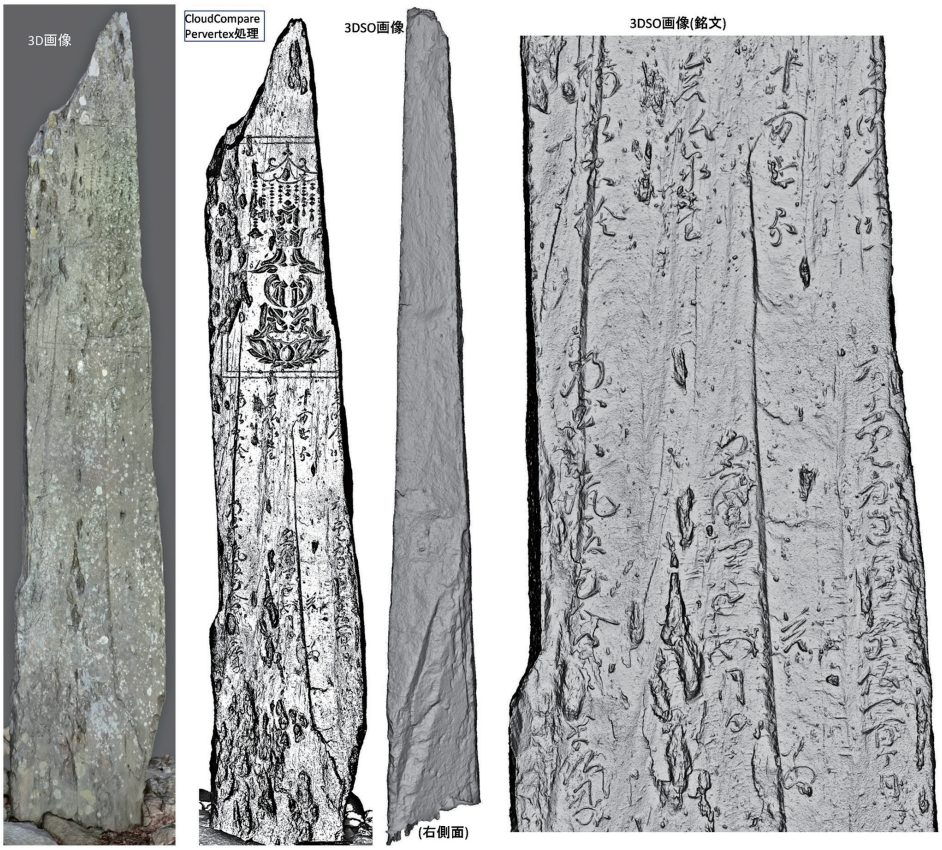
22.2cmである。地輪下端を基準にして方眼をかけると火輪の軒端の右端はわずかに長いが、碑面の荒れによる誤差からすればほぼ同等ともいえる。右端は深さはラ字で4.5mmである。

願文は中央下部に「元徳三（1331）年七月■日」、右行に「右志者為過去善尼相」、左行に「當于一百ケ日忌辰也」とあり善尼の百か日の追善供養塔とみられる。なお、本板碑群中に下からアン・バン・ラン・カン・（ケン剥落）とのみ主尊の位置に刻まれた板碑が存在することは注目される[25]。

⑸　長泉院板碑群No.３興国４年板碑[26]

石巻市東福田沢向に所在する長泉院の参道階段脇に他の板碑４基・石碑とともに並んでいる。地元の長老によると、谷をはさんで約260mほどの対面の山裾である馬場という地域から他の板碑とともに出土したという。馬場地区ではその東部において66基の板碑が山裾から出土した山口家板碑群が著名である[27]。また、馬場地区の西側には線刻五輪塔を含む宮の上板碑群が分布する。一帯は北上川東岸、上品山西麓にあたり、南方に倉の迫・館・屋木沢題目板碑群、北方に建立寺板碑群などが密集する板碑と城館跡の密集地帯である。なお、前述の道的板碑群の元位置推定地から北上川をはさんで約3.7km、さらに高福寺奥の院の双円性海塔板碑から低地をはさんで約12kmを計る（30図参照）。

石材は井内石。地上高247cm、幅45cm、厚さ17cm。上部右側欠損。碑面頭部左側剥落。頭部形態は破損のため不明。体部形態は残存部から両側直立と推定。碑面は自然面？を研磨している。願文付近は顕著な横削りが認められ、旧字を消して刻んでいる可能性がある。右側辺



11図　長泉院板碑No.３

は割り面（大部分欠損）。左側辺は割り面。裏面は割り面。側面、裏面を割り成形、整形とみる。碑面は平滑であり研磨されているとみる。

主尊は二重の枠線の中に梵字で下からア・ビ・ラ・ウン・ケン（大日報身真言）を薬研彫して五輪塔を造形している。見事な天蓋と瓔珞を冠して蓮座の上に載る最高位の構成を示す。このタイプの天蓋について中村光一氏は「八角型天蓋」と名づけ、その理由を「正面観に３面の下り屋根を描き、かつ軒端が反り返るもの」で「屋根上にハミ出し表現される反対面の軒端反り返し位置から見て八角と解し」ている。その分布エリアは「山内首藤氏の相伝所領とその至近」にほぼ重なるとし、「桃生氏惣領の支配地に採用された天蓋型式」としている[28]。

地輪は右側をアの正字、左側を鏡文字にして向かい合わせにしている。水輪は左側をビの正字、右側を鏡文字として背中合わせにしている。火輪は右側をラの正字、左側を鏡文字にして火輪の形態に傾けて向かい合わせにして両端は水平からわずかに上向きとなる形態を示す。特徴的な形象として四画目の尖頭の下、下のビのイ点との間に両眼状の造形をしていることで、後述するように高福寺例と同様地域的、時期的特徴を示している。風輪のウンは左側が正字で、右側が鏡文字となり背中合わせとしている。空輪のケンは正字一字である。五輪塔の造形は両眼状彫り部の存在を含めて元徳３（1331）年銘の高福寺奥の院の板碑群№３に酷似している。五輪塔の残存する高さ42.0cm、最大幅は火輪の軒端で右端がわすかに欠損しており23.5cm。地輪はアの下端の両端で22.4cmであり、蓮弁にくるまれ、二重線の上部を開いた蓮実が組み込まれている。なお火輪の右端は欠損しているが、方眼をあてはめると火輪の左端はア字の左端に一致している。深さはア字で4.0mm、ラ字で2.1mmである。

二重長方形枠線の下に「光明遍照　十方世界　念仏衆生　摂取不捨」が四行に刻まれる。『仏説観無量寿経』の一文であり、板碑の用例は多い。現存最古の双円性海塔板碑である正応五（1292）年銘板碑（群馬県高崎市）もこの偈を用いている。

年号月日は興国４（1343）年12月である。願文は「右志者為過去宗仏一百ヶ日／興国四年臘月日／乃至等流彼是含■■報？仏恩」、「臘」の

12図　長泉院板碑№３　主尊

右に「癸」、左に（「未」）。「宗」の字体は「家」のようにも見えるが法名と見た場合の可能性から「宗」とした。宗仏の百か日の追善供養塔である。法名「宗仏」に似た事例は大崎市古川の童子稲荷社の板碑№４に「宗阿弥陀仏」がある[29]。興国４（1343）年は南朝年号であるが、康永元（1342）年、奥州総大将石堂義房が三迫合戦（栗原市）で北畠顕信勢を破ると南朝勢は大きく後退しており[30]、板碑の紀年銘としても興国４年が北上川下流域の最後とみられ、2.5mの巨碑はこの地の南朝勢力最後の有力者とみられる。天蓋、瓔珞、蓮座、偈を具備する最高位の板碑で、後述する群馬県龍光寺の貞治３（1364）年銘聖香逆修碑はさらに、一対の蓮を生けた花瓶が加わるが、構成上匹敵する。地上高は2.5mとさらに高い大型板碑である。火輪ラの形態に両者は大きな相違がみられ、地域の独創性を示す。在地領主クラスと考えられる追善供養塔である。

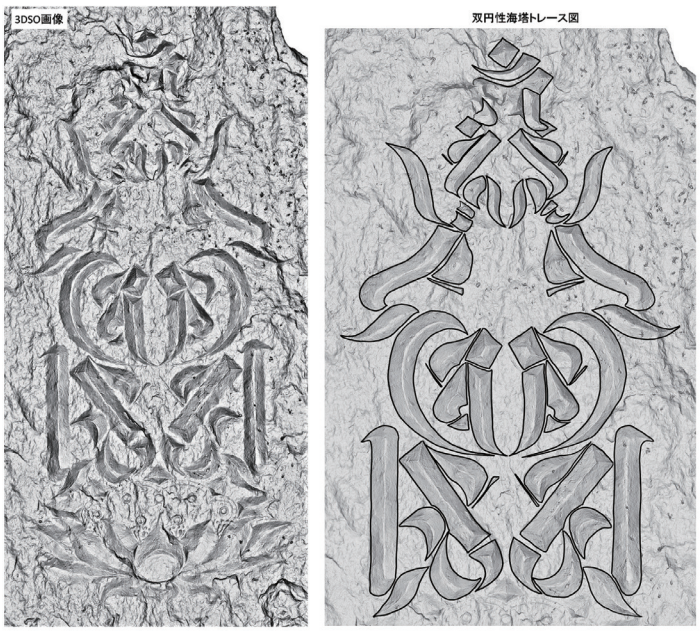
⑹　多福院№63応永20年銘板碑[31]

石巻市吉野町１丁目に所在する多福院（元亀元（1570）年開山）境内に立つ93基の板碑（草刈山から移設した板碑16基を含む）のうち墓地内山際に立つ石巻地域最後の大型双円性海塔板碑である。同地は天台宗・日輪寺跡地であり、日輪寺以前から阿弥陀峯の聖地として板碑造立地であった考えられている[32]。

石材は粘板岩（井内石）。地上高2.83m、幅66cm、厚さ15cm。右上一部欠損。頭部形態は破損のため不明。頭部の残存部に剥離加工残る。体部形態は両側平行に近い。碑面は割り面を細かく剥離調整。右側辺は剥離加工整形。双円性海塔像の右側に自然面残る。左側辺は割り面を細かく剥離調整。裏面は割り面。割り成形、剥離加工整形。

主尊は梵字で下からア・ビ・ラ・ウン・ケン（大日報身真言）を薬研彫して五輪塔を造形し、蓮座に荘厳されている。

地輪は右側をアの正字、左側を鏡文字にして向かい合わせにしている。水輪は左側をビの正字、右側を鏡文字として背中合わせにしている。火輪は右側をラの正字、左側を鏡文字にして火輪の形態に傾けて向かい合わせにして、両端は短く反りあがる形態を示す。風輪のウンは左側が正字で、右側が鏡文字となり背中合わせ



13図　多福院板碑№63　主尊

としている。空輪のケンは正字一字である。左下半部が欠損している。五輪塔の高さ80.5cm、最大幅は火輪で47.2cmである。地輪最大幅は上端にあり40.5cmである。深さはラ字が最深で12mmに及ぶ。他例と比較して横幅が拡がり、火輪の両ラ上部の間の空間が空いている。

蓮座の下に光明真言「オンアボギャベイロ／シャノウマカボダラ／マニハンドラマ　ジンバラハラ／バリタヤウンダ」が四行に刻まれる。

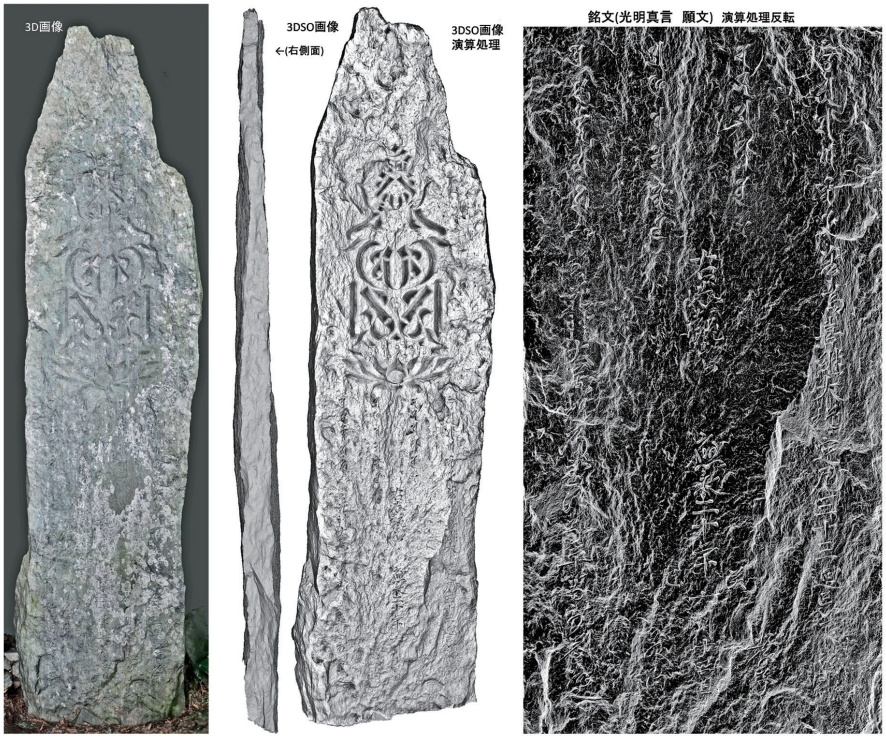
年号月日は応永20（1413）年６月14日。光明真言の下に願文が配される。中央に「右志趣者　　応永二十年　六月十四日　孝子敬白」。「年」の下の一字分空白の右に「癸」、左に「巳」。「十四日」の右に「孝子」、左に「敬白」。

右行に「奉為喜継大禅定尼三十三廻忌辰出離」。左行に「生死証大菩提乃至法界平等利益故也」。喜継大禅定尼の33回忌追善供養塔である。蓮座と光明真言を備え、高さ2.8mという双円性海塔板碑最大の法量から当地域の有力者一族と考えられる。

⑺　米山町桜岡今泉Ｍ家旧墓地の応永23（1416）年銘板碑

登米市米山町桜岡今泉Ｍ家旧墓地の板碑は残念ながら現在は確認できない。木村一郎氏の『郷土史を探し求めた歩み』に掲載されている佐藤信行氏との共同研究「米山町板碑調査報告」に掲載されている異形の双円性海塔板碑である。

北上川下流の両岸から迫川の丘陵縁には多数の城館跡が分布している。戦国期の葛西氏の居城とされる保呂羽館跡は今泉の北東約５km（直線距離）の北上川西岸に位置する。今泉地区にも今泉三郎の居館跡と伝えられる今泉館跡があり、一画には古舘神社があり、北側の南斜面一帯に今泉板碑群（16図№１）が立地する。Ｍ家旧墓地はその分布の西端付近に位置すると推定している。今泉地内には米山町域で善王寺地区とともに板碑が多い桜岡地区の中でも板碑が４地点に10基以上と集中する。紀年銘が確認される板碑はいずれも応永９（1402）年～応永

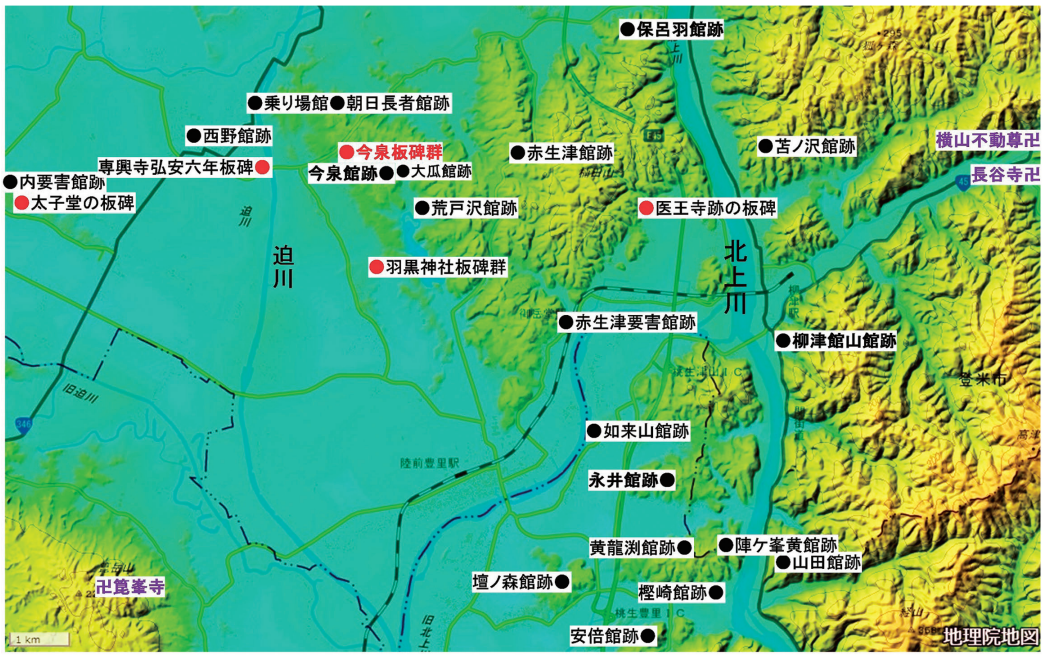


14図　多福院板碑№63

28（1421）年の６基であり15世紀前半代であることから「米山町板碑調査報告」では今泉館跡との関わりがあるとする。また、その２kmほど南方の桜岡楠田の羽黒神社板碑群には桜岡地区最古の弘安７（1284）年銘板碑を含む５基の板碑がある。羽黒神社は宮城県神社庁ＨＰ検索によると「大同２（807）年６月、坂上田村麻呂の勧請にかかり、比叡山延暦寺第三世座主慈覚大師圓仁に依って開かれ、桜岡山照雲寺と号し、天台宗修験道羽州羽黒派に属していた。」という由緒を持つので、天台宗寺院に由来し、後に羽黒修験化したものと考えられる。桜岡西野・専興寺の弘安６（1283）年銘板碑の存在を含め、桜岡一帯は鎌倉後期には板碑造立が開始されている。なお、中津山・太子堂の「応永三十■」年銘板碑の偈「聖主天中天／迦陵頻伽声／哀愍衆生者／我等今敬礼」（妙法蓮華経化城喩品第七）について、「米山町板碑調査報告」では、南方約６kmに位置する篦峯寺の影響を指摘する。総じて米山町域では室町期に板碑造立が最も盛行し、城館域と重複、近接する例が多い。今泉館跡については前述したが、その東側に位置する大瓜館跡（貝待井）は、赤色立体地図（谷口浩充氏提供）では80m前後の隅丸方形域を見事な二重土塁と空堀で防御する主郭が確認されるが、葛西氏家臣大瓜玄番の居城であり、後に石巻市大瓜に移転したと伝えられるとのことである。

以下、「米山町板碑調査報告」及び『米山町史』[33]による。Ｍ家旧墓には２基の板碑があった。１基は種子不明で偈「一切善悪　都莫思量」、「応永二十八（1421）年四月二日」の紀年銘と「為一十三年故也／為■■禅門之／孝子敬白」の願文がある。

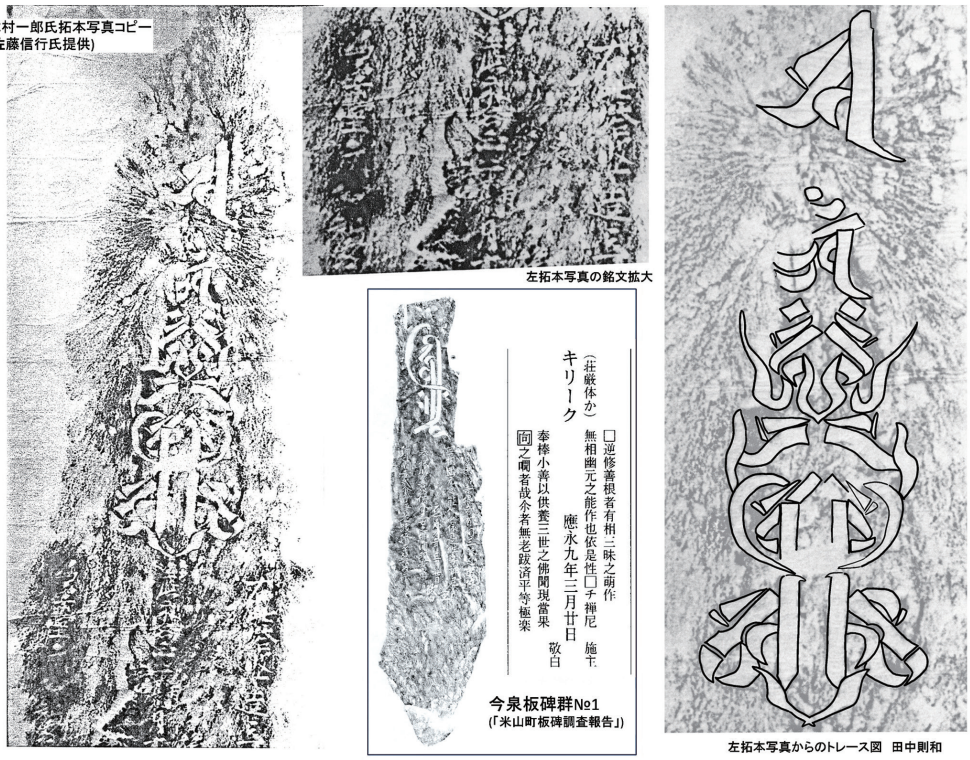
応永23（1416）年銘板碑は、主尊を上位に種子「サ」、その下に「双円性海塔」を配する。「米山町板碑調査報告」では、「拓影写真が残るのみ」とし、法量、遺存状況、色調、石質、成形調整は不明で銘文は『登米郡史』によるとしている。拓本写真により主尊と願文を読み取っているが掲載図は印刷のため不鮮明であるため、佐藤信行氏から拓本写真のコピーをいただき双円性海塔のトレース図を作成するなど検討することができた。同氏に深く感謝する。



15図　桜岡今泉周辺の板碑・城館跡など関連図（地理院色別標高図を下図とする）

応永23年銘板碑の双円性海塔は最末期の類例で「アビラウンケン」で五輪塔を造形するが、宮城県内では類例を見ない形態をとる。地輪は左側をアの正字、右側を鏡文字にして背中合わせにして互いの終筆を中央部で合わせている。水輪は左側をビの正字、右側を鏡文字として背中合わせにしている。火輪は左側をラの正字、右側を鏡文字にして、本来の縦画を五輪塔の屋根形にしている。いずれも終筆を縦に描くために火輪の軒端の形態としては異様である。風輪のウンは左側が正字で、右側が鏡文字となり向かい合わせとして互いに三筆目の終わりを中央で連結してアの終筆と形態を合わせている。以上のように地水火風輪の左を全て正字、右を全て鏡文字としている点で他の双円性海塔と異なる特徴を示す。空輪のケンは正字一字である。左上半部が破損している。

願文は主尊中央の直下に「応永念三（1416）年八月十八日」。「念」は「二十」の代用字。「八」の右に「丙」が見えるので反対側の文字痕跡は「申」と推定できる。碑面下部に「施主／敬白」。右行に「右此塔婆造立志」、左行に「為宇道文公知客」と刻まれる。銘文下部は拓本写真では確認できないが『登米郡史』によるとする。時期的に、種子サは百か日の主尊である観音菩薩とみる。したがって「宇道文公知客」の百か日の追善供養塔とみておきたい。なお、『弘法大師逆修日記事』では「逆修日」を「八月十八日」としており日付は一致する。また、「知客」は「知客（しか）は禅宗寺院の役職の一つ。六頭首（ろくちょうしゅ）の第四位。古くは知賓（しひん）ともいった。寺院に来る賓客や修行者の送迎接待を司る役僧。典客・典賓ともいい、知客寮を客司ということから、客司ともいう。臨済宗では、役職名であると同時に僧階の一つにもなっている。」（つらつら日暮らしWiki〈曹洞禅・仏教関連用語集〉・Wikipedia）とする。とすれば「宇道文公知客」は「公」を敬称として、「宇道文公」という禅宗の僧が存



16図　今泉M家旧墓地の応永23年銘板碑（木村一郎氏拓本　佐藤信行氏写真コピー補正）

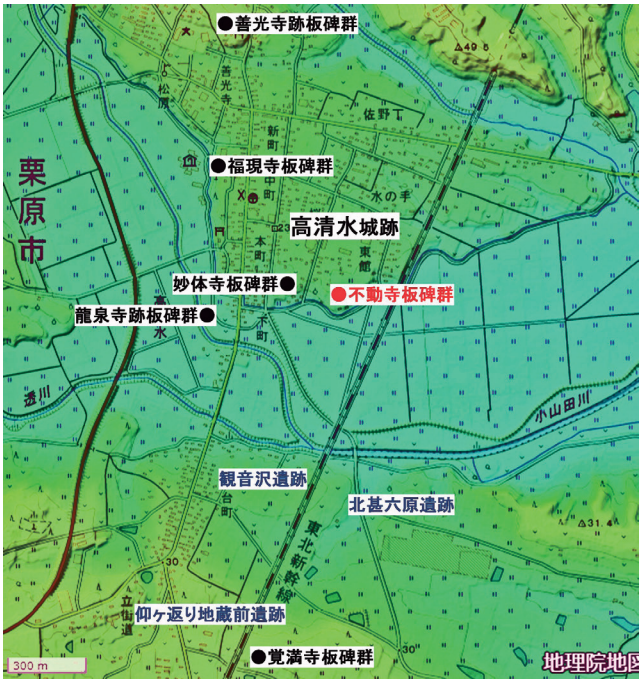
在したことになる。この項については菅原研州氏のご教示を得たことを謝する。全体としては「宇道文公」という禅僧の百か日の供養塔を主尊の観音菩薩種子と双円性海塔の形式をとった希少な例となる（後述）。

⑻　高清水・不動寺跡の板碑№７

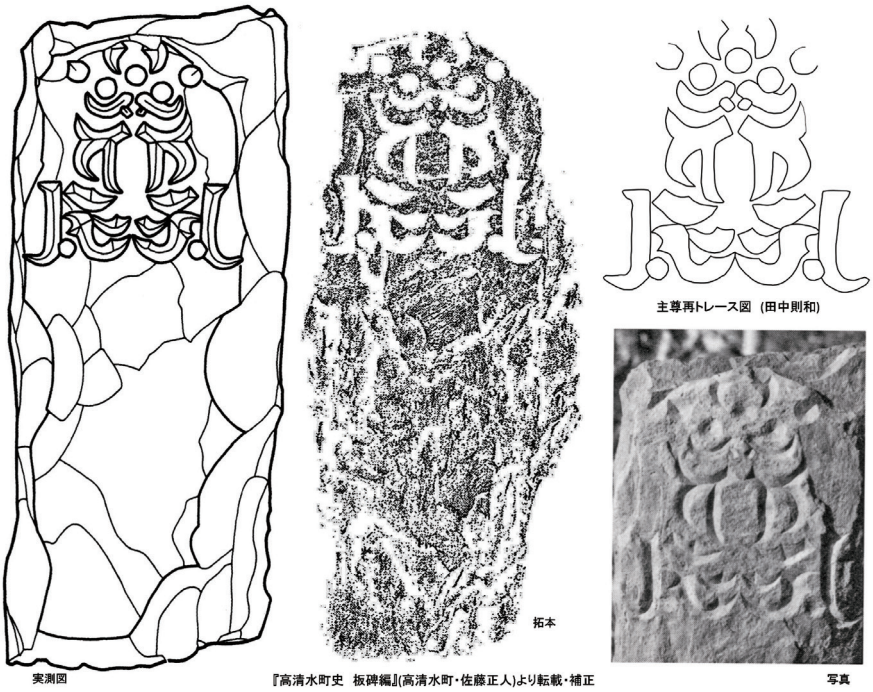
栗原市高清水東館に所在する。入口に不動寺跡の石碑が立つ。高清水城跡の東南辺に位置する。高清水城は「天文年間（1532～1554）に大崎氏一族の高泉木工権頭直堅が築城したといわれる。大崎氏滅亡後の天正18・19（1590. 1591）年には大崎・葛西一揆において伊達政宗の陣所となった。（中略）その後、仙台藩領高清水要害として、以後明治維新まで石母田氏が代々居住した。」（『高清水城跡・佐野遺跡』高清水町教育委員会　2005年）

以下、周辺板碑群と歴史的環境について主に佐藤正人氏の労作『高清水町史　板碑編』（2001年）を参照する。大崎平野の中で旧高清水町域は79基の板碑が集中する。板碑の造立は弘安（1278－1288）年に始まる。中でも前述の高清水城跡（登録範囲）と重なる範囲に板碑群が多く、福現寺板碑群（11基）がその北西縁、妙体寺板碑群（25基）が南西縁、不動寺跡板碑群がその南東縁に位置するのは興味深い。板碑の年代としては鎌倉末期が盛行期であり、福現寺の北方約0.5km に位置する「日本三善光寺」の一つとして隆盛を伝えられ、鋳造仏の一つは鎌倉期制作の善光寺式阿弥陀如来であることが判明している[34]。善光寺の跡の「北条塔」と呼ばれる正慶２（1333）年５月22日銘板碑の考察などから佐藤正人氏は北条政権との関わりを推察している。本旧町域を含む長岡郡は文治５（1189）年に畠山重忠に与えられ、元久２（1205）年、同氏滅亡により長岡郡地頭職は常陸大掾一族の平行幹に与えられている。佐藤正人氏は鎌倉末期には高清水（高泉）が大掾氏の拠点となっていたとする。また、同氏は南北朝期貞治２（1363）年の奥州管領の南朝方南部氏討伐における伊賀氏の「府中？高清水下向」などの例を挙げ、府中と並ぶ戦略上の拠点とする[35]。

板碑の造立は応安９（1376）年銘板碑までであり、佐藤正人氏は大崎氏が長岡郡に居城を構



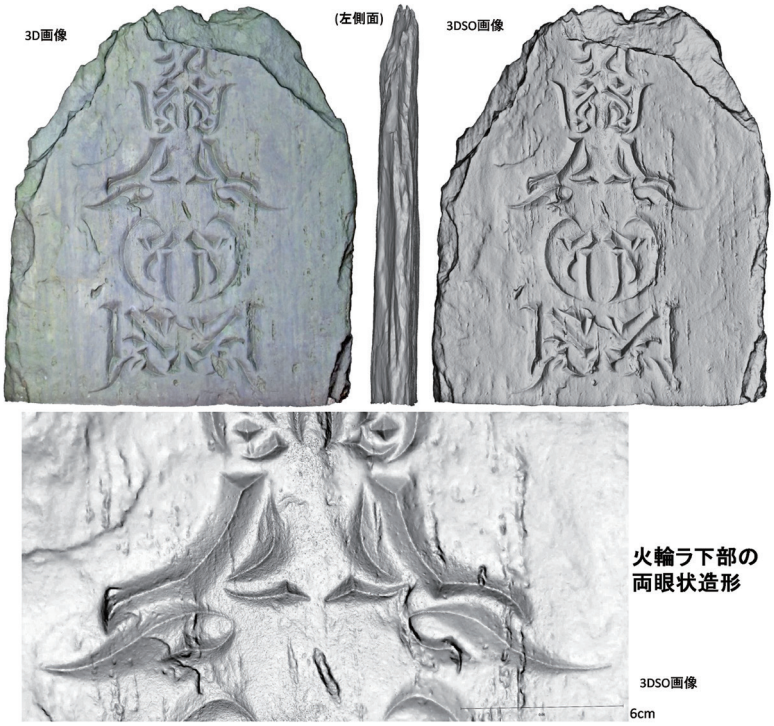
17図　周辺の中世関連主要遺跡（地理院色別標高図を下図とする）



18図　不動寺跡№７板碑

える応安５（1373）年により新しい供養方法が取り入れられたとする[36]。なお、小山田川、透川の南岸には中世期遺跡が密集し、発掘調査により掘立柱建物跡、井戸跡、土倉跡、竪穴遺構、土坑跡等や建築材などが出土したことで著名な観音沢遺跡[37]、同じく中世瓦窯跡の良好な遺存が確認された仰ヶ返地蔵前遺跡、松島・円福寺六世覚満の開創の可能性がある覚満寺跡と板碑群が知られている。不動寺跡は、『高清水拾遺志』（1798年）に記された「旧寺六ヶ寺之跡」の一つとされ、「北条時頼入道旅庵之跡也」との伝承は、前述の「北条塔」とともに、当地の鎌倉末期における北条政権との関わりを考える上で注目される[38]。

不動寺跡の板碑№７は№６の背面である。上半を欠損している。№６は元徳元（1329）年の板碑とするも元弘（1331）、元応（1319）の可能性ありとする。残存長70.9cm、幅29.8cm、厚さ7.0cmである。石材は粘板岩（井内石）である。碑面は延宝年間の開山碑に転用されている。大きな剥離面に以下の願文を刻む。中央に「元徳元年十一月日」、その下に「敬／白」。右行に「右志者為■」、左行に「逆修仍至■」が残存しており、逆修塔である。№７は佐藤正人氏によれば主尊以外は認められない。主尊を刻むに際し、「周囲を平鑿で調整」とする。梵字の正字、鏡文字を組み合わせたア・バンとランの下端を確認できることからア・バン・ラン・カン・ケン（大日法身真言）を薬研彫して五輪塔を造形していると考えられる。同氏は表裏の加工状況から№７は追刻とし、彫りの技法から中世のものとして元徳元年に近い時期を推定している。ただし、これを逆修塔造立者死去に伴う彫刻あるいは工程差とし二面観の板碑の可能性もあるとみるが、現在、本地は竹藪が密生しており、以前の調査者が「石（の位置）をバラバラにした」ので、他者の立ち入りは許可できないとのことで検討できなかった。掲載図版は『高清水町史―板碑編―』図版の転載及び再トレースによる。図像の近似例としては性海寺の「絹本著色五輪双円塔」が挙げられる（後述）。



19図　堀ノ内の板碑

⑼　三輪田・堀ノ内の板碑

石巻市三輪田堀ノ内の上品山西麓に所在する。本年３月に石巻市博物館より「調査報告」として拓本写真付きで発見が周知された板碑である。調査にあたりご協力をいただいた同博物館に厚く感謝する。三輪田一帯は高徳寺の宮城県最古の文応元（1260）年銘板碑・正応５（1292）年銘線刻五輪塔最古碑、応永16（1409）年銘の165人結衆の十三仏信仰を表す見事な板碑など200余年にわたり北上川下流域の板碑の一大集中地域として優れた仏教文化を示した地域である。

現況は丘陵斜面に設けられた小平場の小祠とともにコンクリートに固定されて立つ。石材は粘板岩（井内石）。地上高は41.5cm、幅35.6cm、厚さ4.4cm。頂部破損。頭部は破損のため不明だが剥離加工の可能性。体部形態は両側直立。碑面は平滑で丁寧に研磨されている。右側辺、左側辺ともに剥離加工整形。裏面は自然面。成形・整形は堆積層から乖離した自然石を利用か。

主尊は梵字で下からア・ビ・ラ・ウン・ケン（大日報身真言）を薬研彫して五輪塔を造形している。地輪は右側をアの正字、左側を鏡文字にして向かい合わせにしている。水輪は左側をビの正字、右側を鏡文字として背中合わせにしている。火輪は右側をラの正字、左側を鏡文字にして火輪の形態に傾けて向かい合わせにして両端水平からわずかに上向きとなる形態を示す。彫りの特徴として薬研上端の変換線が丸みを帯びていて輪郭が明瞭でない。研磨の結果とみられる。

特徴的な形象として四画目の尖頭の下、下のビのイ点との間に両眼状の造形をしていることで、後述するように地域的、時期的特徴を示している。風輪のウンは左側が正字で、右側が鏡文字となり背中合わせとしている。空輪のケンは正字一字である。五輪塔の造形は両眼状彫り部の存在を含めて元徳３（1331）年銘の高福寺奥の院の板碑群№３、長泉院板碑群№３興国４（1343）年板碑に酷似しており、14世中・後葉

20図　堀ノ内の板碑　主尊

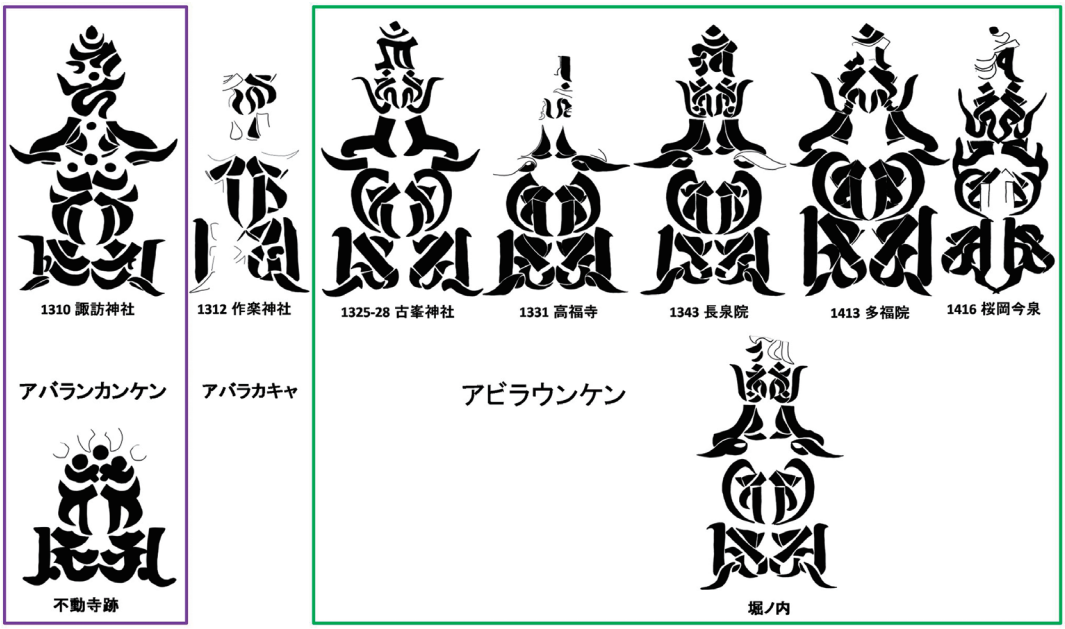
の年代が推定できる。ただし、水輪の最大径が上位となり、両眼状彫り部の形がほぼ同じであるのは長泉院板碑群№３興国４（1343）年板碑と本例であり、本例も14世紀第三四半期の可能性が高いとしておきたい。五輪塔の残存する高さ36.3cm、最大幅は火輪軒端で21.3cmである。地輪は右端が磨滅しているが３Ｄ画像斜光処理により19.6cmと計る。深さはア字が最大で3.6mmである。

３　宮城県の双円性海塔板碑の類型と変遷

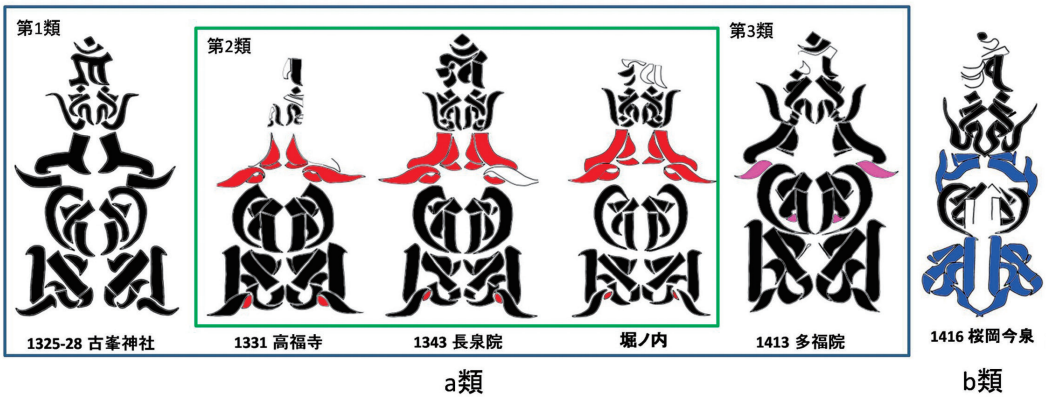
五輪塔を構成する梵字大日五字真言の種類から類型は３大別される（以下、「タイプ」と表現　21図）。A.「アバランカンケン」（大日法身真言）タイプ、B.「アバラカキャ」（五大種子）タイプ、C.「アビラウンケン」（大日報身真言）タイプである。A.「アバランカンケン」タイプは頂部の宝珠と両バンを統合する塔中央の円孔を特徴とする。これらは板碑においては紀年銘からA→B→Cのように変遷する。紀年銘の認められない不動寺跡例は諏訪神社例との近似、堀ノ内例は「アビラウンケン」タイプの中でもイ点の先端が多福院例に近いことから21図のように紀年銘列の中に概ね位置づけられる。このような梵字大日五字真言用例の変遷が齋藤彦松氏の指摘した「信仰遺品」の全国的傾向と一致することは、すでに勝倉元吉郎氏が『北上川下流域のいしぶみ』（1995年）中の「双円性海塔」の項において指摘しているところである。塔の性格として概ねA類は結衆、逆修、C類は追善供養が多い傾向が認められる。

五輪塔の彫法では仙台市郡山地区のA.「アバランカンケン」タイプとC.「アビラウンケン」タイプの古峯神社例は幅が狭いこじんまりした彫りである。同地域の種子の彫り方と異なり、彫り部の密度の濃さに対応しているとみられる。北上川下流域のB.「アバラカキャ」タイプとC.「アビラウンケン」タイプ及び高清水の「アバランカンケン」タイプは同地域の種子の彫りと共通した比較的幅の広い彫りであり地域的な差が認められ、郡山地区は安山岩、それ以外の地区は粘板岩という素材の違いに対応した工人集団の彫法の違いと考えられる。

C.「アビラウンケン」タイプ（22図）は梵字の組み合わせ方から２類に大別され、ａ類は地輪のア（右側正字）を向かい合わせ、水輪のビ（左側正字）を背中合わせ、火輪のラ（右側正



21図　宮城県域の双円性海塔図像の変遷（３Ｄ画像トレース図・スケールは同一に調整）



22図　「アビラウンケン」タイプ塔図像の変遷（同一スケールに設定）

字）を向かい合わせ、風輪ウ（左側正字）を背中合わせ、空輪ケンは正字一字の組み合わせである。ｂ類は登米市の桜岡今泉の１例で地・水･火･風輪は左を正字として背中合わせ、空輪ケンは正字一字の組み合わせである。梵字の組合せという点では真言宗『白宝抄』（1284年[39]）『白宝口抄』（13世紀）掲載の双円性海塔はアバンランケンではあるが、同じく左側は全て正字である[40]。これらは、紀年銘からａ→ｂ類と変遷する。ｂ類の１例の性格としてはサ種子から追善とみたが、日付は前述のように逆修日に相当している。

ａ類は主として火輪のラの特徴から３類に細別され、第１類は1325－1328年銘の仙台市古峯神社１例で、火輪ラを屋根形状に合わせ、鶯点により軒端が反りあがる特徴を持つ。第２類は

石巻市上品山西麓から対岸の旭山南麓に鎌倉末期から南北朝初期とみられる３例があり、両ラの鶯点の内側を眼状に造形しているのが特徴となっている。第３類は眼状変形部を消失した石巻市多福院の1413年銘である。塔の性格として第１類は逆修・結衆、２．３類とも追善供養塔であり、「アバランカンケン」タイプから「アビラウンケン」タイプへの移行は逆修・結衆から追善を主体とする傾向に対応するとみておきたい。

４　東日本例との比較

全国14例（23図）の中で今回、集成した双円性海塔板碑に関連もしくは近似した東日本の３例を実見し、３Ｄ記録をとることができたものについて比較・検討する。

(1)　福島県郡山市西田町関根･日本武神社の板碑

『郡山の中世　板碑の世界』(2014年)によれば、西田町には18基の板碑があり、日本武神社境内には弘安元（1278）年から文和三（1354）年銘を含む８基の板碑がある。前掲書では嘉元（1303－1306）年の「アバラカキャ」を組み合わせた五輪塔図像の双円性海塔板碑として紹介され、郡山市重要有形文化財に指定されている。同じ関根地区から移設されたとのこと（市教育委員会による説明板）であり、板碑の集中する地区である。この板碑は郡山市文化財マップによると原位置から約300m西方の（阿武隈川寄り）付近に位置したらしいが、田中正能氏論文によれば、それ以前は橋に利用されていたとのことである[41]。

阿武隈川東岸に立地し、田中氏により関根の

	西暦	紀年銘	所在	主尊を構成する真言・種子	荘厳	偈　真言	願文	法量	石材	所有・管理者	主要文献
1	1292	正応５年壬辰10月25日	群馬県高崎市	アバランカンケン（大日法身真言）	なし	光明遍照十方世界／念佛衆生摂取不捨	「正応五年壬辰十二月二十五日」	136. 37. 3	緑泥片岩	個人	群馬県史　資料編８
2	1317 −19	文保？（or嘉元）	福島県郡山市	アビラウンケン（大日報身真言）	月輪	不明	「■保／（三年）月十（六）日」	80. 58. 12	花崗岩	日本武神社	郡山市史８
3	1310	延慶３年12月中旬	宮城県仙台市	アバランカンケン（大日法身真言）	なし	なし	「延慶三年庚戌臘月中旬面々各々 敬白」	140. 60. 23	安山岩	諏訪神社	仙台市史　特別編５
4	1312	正和元年４月26日	宮城県石巻市	アバラカキャ（大日如来真言・五大の種子）	蓮座	なし	「為仏眼幽儀■　■／于時正和元年四月」「二十／六日」	167. 27. 22	粘板岩	作楽神社（道的）	佐藤雄一　河南町の板碑
5	1326 −29	嘉暦	宮城県仙台市	アビラウンケン（大日報身真言）	蓮座	なし	「嘉暦■■／三十五」	73. 54. 7	安山岩	古峯神社	仙台市史　特別編５
6	1331	元徳３年	宮城県石巻市	アビラウンケン（大日報身真言）	なし	なし	「元徳三年七月日／右志者為過去善尼相／當于一百ケ日忌辰也」	170. 39. 5	粘板岩	高福寺	佐藤雄一　河南町の板碑
7	1343	興国４年	宮城県石巻市	アビラウンケン（大日報身真言）	天蓋・瓔珞蓮座	光明遍照／十方世界／念佛衆生／摂取不捨	「右志者為過去宗仏一百ヶ日／興国四年癸未臘月日／乃至等流彼是含■■報？仏恩」	247. 45. 17	粘板岩	長泉院	勝倉元吉郎他　北上川下流域のいしぶみ
8	14世紀		宮城県石巻市	アビラウンケン（大日報身真言）	なし	なし	なし	42. 36. 2	粘板岩	個人（三輪田）	石巻市博物館 Twitter230330
9	1364	貞治３年	群馬県富岡市	アビラウンケン（大日報身真言）	天蓋・瓔珞・蓮座・花瓶	光明真言	「貞治三年甲辰卯月日／逆修／聖香」	139. 46. 4	緑泥片岩	龍光寺	群馬県史　資料編８
10	1413	応永20年	宮城県石巻市	アビラウンケン（大日報身真言）	蓮座	光明真言	「右志趣者　応永二十年癸巳六月十四日　孝子敬白」「奉為喜継大禅定尼三十三廻忌辰出離」「生死証大菩提乃至法界平等利益故也」	283. 66. 15	粘板岩	多福院	石巻の歴史８
11	1416	応永23年	宮城県登米市	イ　アビラウンケン（大日報身真言）	なし	なし	「応永念三年丙申八月十八日」「施主／敬白」「右此塔婆造立志」「為宇道文公知客」	不明	不明	行方不明	佐藤信行・木村一郎 米山町板碑調査報告
12	1490	延徳２年	福岡県柳川市	アバランカンケン（大日法身真言）	不明	不明	『柳河明証図会』によれば地・水輪を通して「玉峰禅師寿位」右行に「延徳二年戊戌三月吉日」	不明	不明	行方不明	木下浩良「柳河明証図絵」に描かれた延徳２年五輪塔板碑
13	不明		宮城県栗原市	アバランカンケン（大日法身真言）	不明	不明	不明	71. 30. 7	粘板岩	個人（不動寺跡）	高清水町史　板碑編
14	不明		福岡県田川市	アビラウンケン（大日報身真言）	なし	左右側面に真言	不明	85. 44. 19	砂岩	不明	野村隆　西国の石造美術三題

23図　全国の双円性海塔を主尊とする板碑

西辺を経由した堂坂から鬼生田を通る南北の道が想定されている。一帯は郡山市地理情報システム（郡山市）によると西側の阿武隈川縁の突出部には平安・中世期の黒田遺跡、南側には同じく西之内遺跡、平館跡、穴沢館跡などの中世期の遺跡が密集し、穴沢館跡では発掘調査により掘立柱建物跡や13世紀末の灰釉瓶子が出土している[42]。

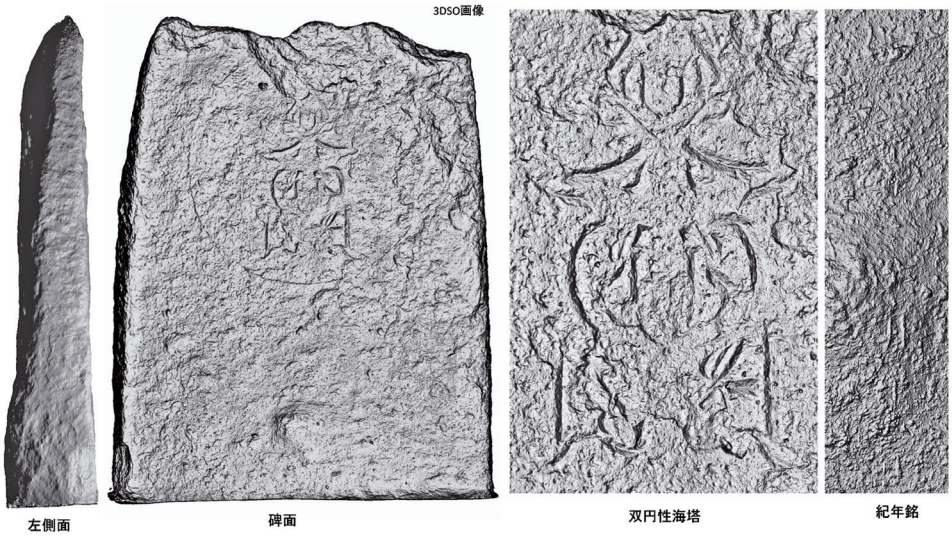
板碑の碑面には月輪の中に双円性海塔図像が主尊として刻まれている。上端欠損で高さ92.0cm、幅69.5cm、厚さ11.8cm。石材は花崗岩とされる（説明板）。碑面は平滑。全体に磨滅が進んでいる。両側面は削り整形の可能性。裏面は粗割りである。

３Ｄ計測の結果、図像は24図のように従来説と異なり、明らかにアビラウン（ケン）の組み合わせであった。三宅宗議氏が大日報身真言とした通りであった[43]。薬研彫りで深いところで3.1mm。「アビラウンケン」タイプａ類に相当する。地輪のア（右側正字）を向かい合わせ、水輪のビ（左側正字）を背中合わせ、火輪のラ（右側正字）を向かい合わせ、風輪ウ（左側正字）を背中合わせ、空輪ケンは正字一字の組み合わせである。形態に差異があり、火輪ラの軒端は反り返る。風輪のウンの下端はへの字タイプである点と月輪に荘厳される点は双円性海塔板碑としては類例がない。

碑面の磨滅が顕著である。願文とみられるものは三行確認した。紀年銘と考えられるものは、月輪の下方に「保」が、その末端の碑最下部に「（三年）■月十（九）日」（（ ）は可能性）が比較的明瞭に認められ、その（年）の右下には「己」？が認められた。「保」の下方には従来説の「嘉」にも読めないことはない文字痕跡が認められたが、より明瞭な「保」が年号の一端と考えた。その上に「文」の痕跡の可能性もある痕跡から年号は「文保」（1317－1319年）の可能性がある[44]。なお、現地には所有者の立てたと思われる説明板があり、そこには「文保三己未年三月」とあり、符合する。また、紀年銘の右行には「右■為■■■」と認められた。左行にも文字状痕跡が認められるが不明。板碑としては最古の「アビラウンケン」タイプであり、ウンが他例にはない形態である点は当地域の製作指導者の系譜を考える上で留意される。

⑵　群馬県高崎市宿大類町Ｓ家の正応５（1292）年板碑

戦国期、和田氏の城館とされる大類城跡の東南端に位置する。南側には武蔵児玉党の一族



24図　郡山市関根の双円性海塔板碑

である大類氏の居館跡[45]があり、室町期の所産とされる。また、『新編高崎市史　通史篇２』[46]によれば、市内の板碑は大類氏により宿大類町から井野川全域にもたらされ、特に大類地区に集中しているとする。また、下大類町の諏訪神社は大類氏による平安末期の勧請としている。

板碑は個人宅地内に立ち、保存状態は良好である。高崎市指定史跡「正応の板碑」の説明板が設置されている。頭部左のみ欠損（台風による倒壊によるという）。頭部に二条線を刻む。地上高130.0cm、幅36.0cm、4.0cm。石材は緑泥片岩。碑面は平滑。頭部の三角形側面より両側側面は細かな剥離加工整形で平滑。裏面は粗割り。碑面は長方形枠線の中に上部に蓮座の上に主尊、下部に銘文が配される。

主尊は梵字で下からア・バン・ラン・カン・ケン（大日法身真言）を薬研彫して五輪塔を造形している。地輪は右側をアの正字、左側を鏡文字にして向かい合わせにしている。水輪は左側を仰月点付きのバンの正字、右側を鏡文字として背中合わせにしている。両バンの中心線頂部に空点よりやや大きな円孔が刻まれ、五輪塔のほぼ中心であることは、仙台市諏訪神社、栗原市不動寺跡例と共通している。火輪は右側をランの正字、左側を鏡文字にして火輪の形態に傾けて向かい合わせにして、両端は短く反り上がる形態を示す。空点は両字の屋根ラインの中央に共通した一点である。風輪のカンは正字一字で、風輪の形態をなぞって一画目の両端を開いているが先端は二股になっている。空輪のケンは正字一字で、頂部の宝珠を仰月点で受け、下部は三脚状になっている。本例の梵字の空点は頂部が明瞭な宝珠形の他はア字の半球形も含め全て球形をしており、全て宝珠を意識している可能性がある。

五輪塔の高さ35.9cm、最大幅は地輪で19.0cm、火輪幅もこれに近く18.2cmである。薬研の深さはカ字の最大4.9mm、ラ字の最大4.8mm、ア字最大4.2mmを計る。

銘文は蓮座下方の中央に「正応五年壬辰十二月廿五日」。『観無量寿経』の一文が右行に「光明遍照十方世界」、左行に「念仏衆生摂取不捨」

3D画像　(右)　(双円性海塔)　(銘文)

25図　高崎市宿大類町Ｓ家の双円性海塔板碑

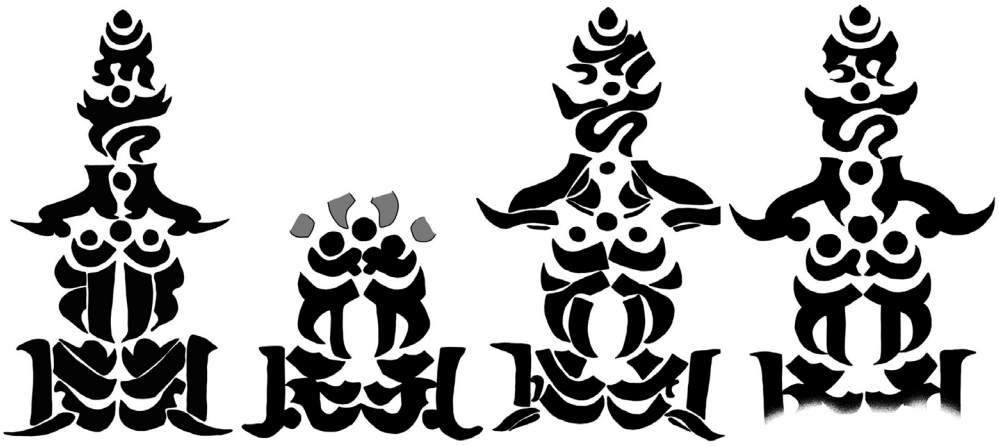
が刻まれる。この板碑の双円性海塔と最も近似している図像は下半のみの残存である栗原市・不動寺跡の例である。Ｓ家の板碑に比べアが変形しているのでやや下った年代かもしれないが、鎌倉末期に収まる可能性が高い。仙台市・諏訪神社例はカンの両側が二股に分かれていない点が後出的であり、火輪のラの起筆部が後の上品山西麓の「アビラウンケン」タイプの塔に続くような複雑な造形に変化をしている。ただし、頂部の宝珠や中心点の円孔は「アバランカンケン」タイプの塔の基本パターンとして守られている。中心点の円孔は性海寺の「木製漆塗彩色金銅種子装五輪塔」（29図）にみられるバンを一つの空点で統合する基本を引き継いでいるとみられる。また、鎌倉末期の「アビラウンケン」タイプである仙台市・古峯神社例はラの形は諏訪神社例より宿大類町Ｓ家の図像に近似し全体の印象も比較的近いことから「双円性海塔」図像としての一貫性を保持していると考えられる。

なお、宿大類町Ｓ家の双円性海塔図像と近似する例に、前述の性海寺（稲沢市）の「絹本著色五輪双円塔」がある。カンの両側が二股に分かれていない点と幅広な点は仙台市・諏訪神社例に似る。バンとアの意匠は「絹本著色五輪双円塔」と不動寺跡例が強く近似している。「絹本著色五輪双円塔」は稲沢市ＨＰでは室町期とされるが、これらの例と近い鎌倉末期である可能性もあるのではないか。

⑶　群馬県富岡市・龍光寺の貞治３（1364）年板碑

龍光寺の創建は西方約3.3kmの宮崎（現富岡市宮崎）において長禄年間（1457～1460年）、上野国甘楽郡奥平郷（群馬県高崎市吉井町下奥平）に住し奥平を称したことに始まる奥平氏の奥平貞俊（美作守龍光）が開基となり貞誉上人を招いて開山とされる。慶長12年の住民移転に伴い宮崎宿から富岡の地に移転[47]。御住職の話ではこの板碑が宮崎から一緒に移設したものか、当地にあったものかは不明とのことである。また、北東３kmには金剛界五仏と有力者20数名の名が刻まれた仁治４（1243）年銘板碑（地上高2.8m）があり、当寺の墓地にも火焔付き月輪を有する阿弥陀三尊種子・平入道銘建治２（1276）年銘板碑（地上高1.2m）が立ち密教的伝統が窺る。歴史的環境として上野国一宮の貫前神社が位置する鏑川流域一帯の有力武士と板碑造立を推進する密教など宗教勢力の存在が窺える[48]。

群馬県指定重要文化財の板碑は境内の堂内に



高崎市・Ｓ家（1292年）　栗原市・不動寺跡　仙台市・諏訪神社（1310年）　性海寺・絹本

26図　「アバランカンケン」タイプ図像の比較
（※トレース図・スケール統一・不動寺跡例の薄色は上方破損のパーツ）

27図　龍光寺の双円性海塔板碑

1343年　長泉院　　1364年　龍光寺　　1413年　多福院

28図　龍光寺板碑と長泉院・多福院の板碑の比較
（双円性海塔のみトレースし３ＤＳＯ画像を薄く表示）

下部をコンクリートで固定。頂部破損、碑面の左上剥落、梵字を組み合わせた五輪塔の地・水輪に剥落。さらに地輪には亀裂が入る。高さ138.5cm、幅43.2cm、厚さ4.3cm。石材は緑泥片岩。裏面には横方向にシマ状の削り加工が認められる。

頭部を山形に細かな剥離加工で整形。その下に二段の切込をつくり、その下に火焔宝珠と瓔珞の付いた天蓋を刻む。外側に一線、内側に二線で輪郭帯をつくり、中央部に大きく「アビラウンケン」の梵字を組み合わせた五輪塔を深い薬研彫で表し、蓮座で受ける。周囲の輪郭帯にも左右に、ア・ビ・ラ・ウン・ケンを、上から下に刻んでいる。五輪塔の地輪は右側をアの正字、左側を鏡文字にして向かい合わせにしている。水輪は左側をビの正字、右側を鏡文字として背中合わせにしている。火輪は右側をラの正字、左側を鏡文字にして火輪の形態に傾けて向かい合わせにして、両端は反りあがる。風輪のウンは左側が正字で、右側が鏡文字となり背中合わせとしている。空輪のケンは正字一字である。五輪塔の高さ67.2cm、最大幅は地輪で31.2cmである。火輪最大幅もこれに近く30.3cmである。彫りは深くア字が最深で13.7mmに及ぶ。左側の「貞誉上人」は龍光寺の開山で後刻。下部外側に、三茎の蓮を生けた花瓶一対、その内に梵字光明真言を二行づつ四行に配し、中央に「貞治三（1364）年卯月日」。「年」と「卯」の間、右に「甲」、左に「辰」。中央最下部の右に「逆修」、左に「聖香」と刻む。聖香による逆修供養塔である。双円性海塔の形は一見、鎌倉末期の仙台市・古峯神社例に似る。しかし、その高度で深い彫法による圧倒的なボリューム感は南北朝期の傑作である。あるいは古典的なモデルが存在したのかもしれない。

龍光寺の板碑を石巻市長泉院・多福院の板碑と比較してみると、火輪ラ字の表現に大きな相違が認められる。すなわち、龍光寺のラは向かい合わせに傾けて五輪塔の屋根のラインを形作っているので先端は大きく反り返っている。石巻市の２例は鶯点のみ正位置にあり、穏やかな短い反りで安定感がある。特異なのは、石巻市長泉院例であり、鶯点の先端を湾曲し、対位置に下瞼状の弧状部を付加することで両眼の印象を与えている。同様の例は14世紀中葉頃の上品山西麓で計３例が確認されている。

５　まとめ

弘安６（1283）年に開眼された愛知県稲沢市・性海寺（真言宗）の木造五輪塔は「理智大日法界三昧耶形法身塔婆」と願文に記され、能作生珠（如意宝珠）が納入されていた[49]。各層には金銅板を切り透かし、組み合わせたア・バ・ラン・カン・ケンが鋲止めされ双円性海塔が表されている（29図）。その目的は願文に「當寺安穏興隆仏法盡未来際利益衆生之願望者也」とある。その法要には愛染明王による修法が行われた[50]。小川豊生氏は実運（真言宗・醍醐寺 1105－1160年）が、「双円」を愛染明王の身体を生成させる胎内五位の観想技法として位置づけ、道範（金剛峰寺 1178－1252年）は「胎内五位」を「五相成身」と重ね合わせ、成仏の階梯を指すとした[51]。頼瑜（高野山→根来寺 1226－1304年）は「双円性海口決」（文応３（1262）年）を木幡観音寺（京都府宇治市）の真空（真言宗木幡義の始祖[52]）より伝授されたという[53]。その「双円性海口伝」（三宝院流報恩院方）の「ह の明は塔婆を表し、「双円」の二字は塔印」とする説明[54]は双円性海塔の板碑の主尊化につながるものと考えられる。このことはすでに野村隆氏が指摘した[55]ところであるが、13世紀半ばには形成されていた双円性海塔を主尊とする板碑誕生の素地となる思想の展開の一つと考えられる。

板碑においては三弁宝珠＋不動種子などの主尊下部に一対の構図で表される双円性海塔図像がすでに建治元（1275）年銘をはじめとして14世紀初めに至るまで埼玉・群馬県東部域など関東西部に分布している[56]が、やがて、板碑の主尊として登場する。見事な遺存例が群馬県の中南部の高崎市宿大類町Ｓ家の正応５（1292）年銘板碑の「アバランカンケン」タイプの双円性海塔である。紀年銘の左右には『観無量寿経』

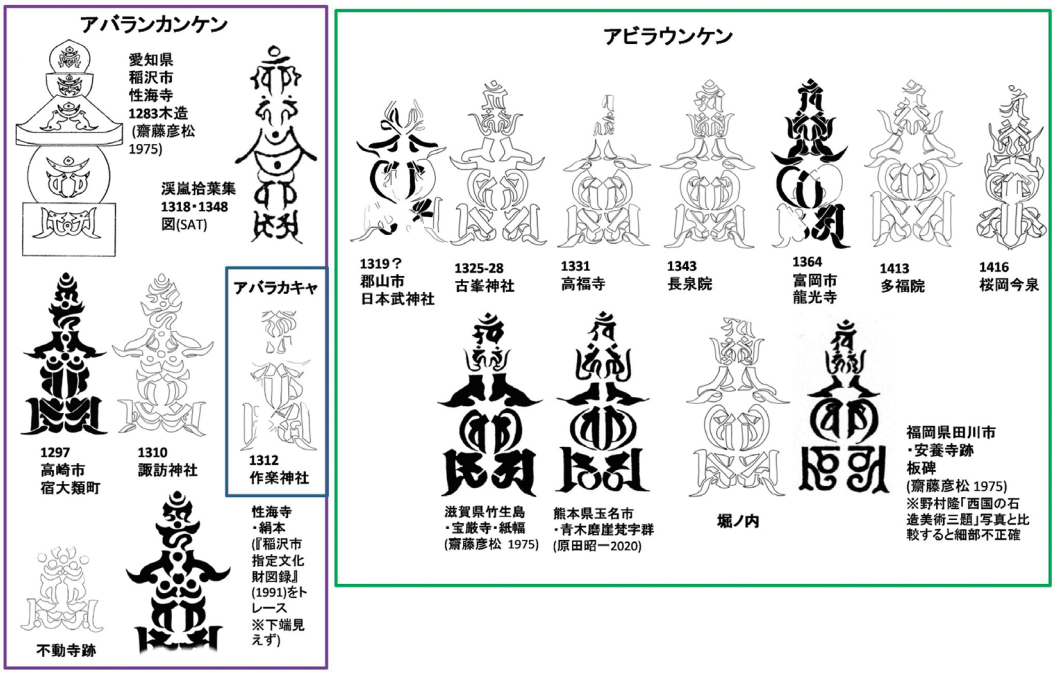
の「光明遍照十方世界　念仏衆生摂取不捨」が刻まれ、浄土往生を祈願する主尊の一つとなる。しかし、双円性海塔を主尊とする板碑は分布は利根川を埼玉県側に越えず、主として奥州南部に分布していく。14世紀第一四半期には福島県郡山市に「アビラウンケン」タイプとして見られる。「アバランカンケン」タイプも延慶３（1310）年には仙台市・郡山地区に彫法のレベルは宿大類町Ｓ家例よりやや劣るものの、さらに意匠化された五輪塔の姿で造立され、幹線ルート沿いに約50km北上した栗原市・高清水地区に14世紀前半頃に受容されている。

齋藤彦松氏が『雙円性海塔信仰の研究』で指摘した「初期は向合せ真言が大日上品真言で中期以降は大日中品真言となっている」傾向は、確実なものだけでも９基に達する宮城県域においても確認された[57]。「アビラウンケン」タイプには宝珠の意識は形態上認められず、鎌倉末期の北上川下流域では「ウン・ケン」の字形は崩さずに表現するようになる。「アバランカンケン」タイプからの転換は鎌倉末期の石巻市鹿又の自然堤防上の道的板碑群中例に見出され、「アバラカキャ」タイプ以後である。「アビラウンケン」タイプは鎌倉最末期の仙台市郡山・北目地区の古峯神社例が初例となり、以後、北上川下流域にて独自のスタイルを産み出して南北朝期に盛期を迎える。

⑴　鎌倉末期の様相―郡山と高清水

この時期の「アバランカンケン」（大日法身真言）の組み合わせによる双円性海塔に特徴的なことはケンの頂部が宝珠形を示すこととほぼ中央に位置する二字のバンの中央上に空点のような円孔を有することである。前者は「能作性宝珠」を納入する性海寺木造塔例からすれば、如意宝珠信仰と合体した五輪塔が板碑の主尊となったこと、後者も性海寺木造塔においてもバン字は一つに統合されており（29図）、「二𑖦円塔を以て双円性海とする」頼瑜などの思想と一致する[58]。

郡山地区では板碑の主尊への「アバランカンケン」タイプの双円性海塔の導入期に嘉元４

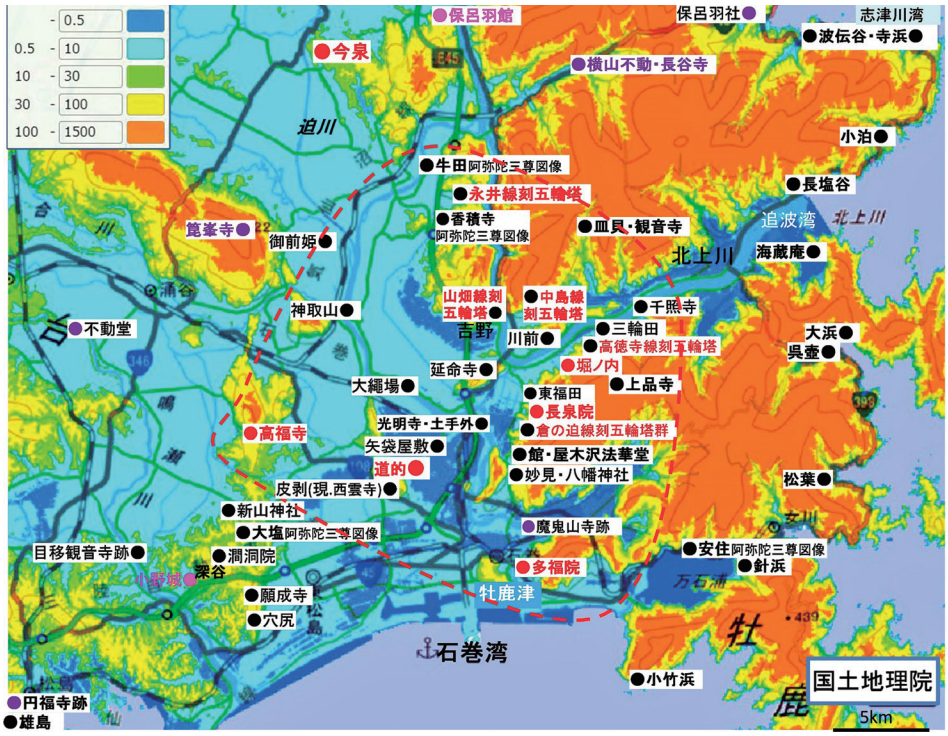


29図　宮城県の双円性海塔図像の全国主要例との比較（画像トレース図・宮城県外を黒色表示）

（1306）年「結衆三十人」銘板碑（宅地）、「アビラウンケン」タイプへの転換が起きた頃に嘉暦元（1326）年念仏結衆板碑（西台畑）、嘉暦３（1328）年四十八ヶ日念仏結衆板碑（八雲神社）が造立される。つまり念仏結衆が極めて多く行われる場と時期であった。大石直正氏は結衆板碑の多さとこの地域の板碑44基中、蓮座を持つ板碑が12基を占める高率であることも含めて「長町・郡山地域」を岩切地区と並ぶ仙台平野の政治的中心であり都市的な場とした[59]。想定される幹線道路と名取川の節点に運輸に関わる有徳人層が形成されている可能性がある。なお、郡山地区は７世紀後半から８世紀の初めに多賀城の前身施設があった地である。

領有関係としては鎌倉中期には名取郡が北条氏領であり、正応５（1292）年には北条氏の身内人とみられる中務丞惟秀が長町地域と考えられる平塚郷を妻に譲っている。考古学的には、諏訪神社元地の南西約１kmの王ノ壇遺跡において鎌倉期の居館・幹線道路跡が発掘されている。その内容から北条氏の支配拠点である名取郡北方政所の可能性があり、一帯は奥大道跡と名取川の結節点に位置する交通の要衝である[60]。

また、「アバランカンケン」タイプの板碑が確認された高清水地区も前述のように鎌倉幕府滅亡直前まで北条氏与党である大掾高泉氏の拠点であり、観音沢遺跡などの中世遺構が密集することから街道沿いに街場や寺社が展開する交通の要衝であったと考えられる。覚満寺から善光寺という二大宗教施設に至る街道周辺には鎌倉後期を主体として曼荼羅板碑を含む78基の板碑が造立された。松島・円福寺の教線である覚満寺跡[61]には、正和２（1313）年銘瓔珞付天蓋・蓮座の逆修板碑が板碑群18基中にある。その西方の約300mの仰ヶ返り地蔵前遺跡では円福寺とつながる鎌倉期の瓦窯跡が発掘され半地下式平窯であることが明らかにされている[62]。したがって郡山と高清水はいずれも交通の要衝に立



30図　北上川下流域の双円性海塔板碑の位置（●赤色）
※黒色：関連する主な板碑　紫色：その他の宗教施設

地し、北条政権に近い領主の存在が認められる街場であった。高清水の寿命院は信州諏訪氏の系譜を伝え[63]、本県最古の仙台市の諏訪神社の双円性海塔板碑は諏訪神社旧境内地にあったことも想起される。両地は幹線ルートにより結ばれているとみられることから[64]、招聘された高度な板碑製作技術者をひきつれた仏教者の存在と移動が想定される。

⑵　南北朝・室町期の様相―北上川下流域から米山へ

「アビラウンケン」タイプの双円性海塔板碑は北上川下流域の石巻湾岸において絶対数は少ないものの南北朝期に盛期を迎え、室町期に至る。その初例は北村高寺（旧河南町）の高福寺元本堂裏手の新庄館跡の麓にある（仮称「高福寺奥の院板碑群」）元徳３（1331）年銘善尼百か日追善供養塔である。注目されるのは後続する1343年銘の東福田・長泉院と紀年銘のない三輪田堀ノ内例と同じ火輪ラ部に両眼状付加部を持つ同一モチーフを有することである。五輪塔において火輪は胸に相当するので眼を創出したとは言えず、「二バン合成の身塔」[65]たる双円性海塔の地域的変容かとしておきたい。

そして、この東福田から北村のエリアには、1312年銘の「アバラカキャ」タイプの双円性海塔板碑を含む北上川の自然堤防に営まれた道的板碑群を含むことは注目される。この一帯は山内首藤氏領の南部から長江氏領の北部にあたる[66]。14世紀末に葛西氏は山内首藤（桃生郡）・長江（深谷保）氏などといわゆる五郡一揆を結んでおり[67]、領域を越えた北上川下流域の僧や工人などの盛んな往来が想定される。

「アビラウンケン」は胎蔵大日如来の真言であり、「五字明」「満足一切智々明」とも呼ばれ、胎蔵曼荼羅そのものの真言[68]ともされるが、金胎不二を表す造形として独自のスタイルがこのエリアから産み出されたことになる。双円性海塔板碑の最集中域が上品山西麓に集中することから『封内名蹟志』（1741年）に文永10年の古石墳有りと伝え、上品山頂付近の万海壇（護摩壇）と呼ばれる方形土壇[69]も伴う上品寺の関与を考えたが、現状の板碑群は弘安９年銘より開始されるも大型の板碑はない。周辺の悉皆調査が望まれる。現段階では前述の背後に「鎌倉権五郎五代後葉」弘安元（1278）年銘板碑を含めて裏山に有する高福寺、文応元年銘板碑を保管する板碑最密集地帯にあり、上品山の「熊野権現」を淵源とする縁起を持つ高徳寺[70]（いずれも元天台宗）などは、招聘された僧などの拠点として双円性海塔板碑の創出に関与した寺院の有力候補としておきたい。

東福田・長泉院の北西方へ約18km、北上川から迫川で通じる登米市米山町桜岡今泉（30.15図参照）の応永23（1416）年例は「アビラウン」までを背中合わせにした双円性海塔であり、板碑としては他に類例を見ない。五輪塔に彫られた熊本県・台円寺跡出土の残存する地・水輪部分が近似する例がある[71]。また、「アバランカンケン」タイプである『白宝抄』・『白宝抄』（真言宗）の図は各輪全てが背中合わせになっている点で近似する。これらの点から本例には真言宗的要素が認められる。上品山西麓の類例や年代が近いながら1413年銘の多福院例とは全く系統の異なる板碑とみられるといえよう。主尊を上位に種子「サ」、その下に「双円性海塔」を配する点でも類例がなく、「サ」の主尊からすれば十三仏信仰による百か日の追善供養塔という点では時代の傾向とは一致するが双円性海塔が下位に下がる点で本来の姿から変質している。さらに、特異なのは銘文によれば被供養者は「宇道文公知客」であり、「知客」は禅宗の役職を指す。とすれば特異な形は、前述のように真言宗もしくはその形式を取り入れた禅宗による双円性海塔の新たなデザインであろうか[72]。歴史的背景としては米山町域では室町期に板碑造立が最も盛行し、本板碑に隣接して応永９（1492）年銘の見事な荘厳体キリークの逆修板碑（16図№１）を含む今泉板碑群がある。密教と十三仏信仰が融合し、禅宗とも関わる独自の地域文化故の双円性海塔の造立と考えられる。貴重な板碑の消失が惜しまれてならない。

6　課題と予察

本稿は宮城県域を主とした双円性海塔を主尊とする板碑の事例紹介にとどまり、予定していた天蓋、蓮座などの属性や同地域の板碑の中での位置付け、関連して検討すべき佐藤信行氏が「梵字で宝塔にアレンジしたもの」[73]とした例などの検討は以下の問題提起とともに今後の課題としたい。

群馬県南西部を初発地とする双円性海塔を主尊とする板碑は福岡県田川市安養寺跡などにみられるものの[74]、鎌倉末期には宮城県域の仙台市・郡山、旧河南町、旧高清水町地区が主造立地となる（計５基）。群馬県域は霜月騒動（弘安８（1285）年）以後は北条氏得宗領であり[75]、宮城県域においては郡山地区は北条氏、河南は山内首藤・長江氏、高清水は北条氏与党の大掾氏の領有地でありこれらの武士による何らかの関与も想定される。鎌倉幕府滅亡後は南北幹線道路の要衝である郡山、高清水では造立は見られず、南北朝から室町期に展開したのは北上川下流域であり４基造立された。その背景にあるのものの一つは、石巻から大崎地方に広がる正応５（1292）年銘石巻市三輪田高徳寺「アビラウンケン」線刻五輪塔２基に始まり、後「アバラカキャ」と少数の五字題目が刻まれる東北地方最多の線刻五輪塔板碑の盛行であり[76]、その最大密集地区である上品山西麓の北境から三輪田地区の存在である。最盛期の14世紀の双円性海塔板碑はこの地区に含まれる。また、この地域では題目板碑群があり、これも線刻五輪塔を取り入れた小群もある。まるで、土豪などのグループが自らの集団の象徴表現を競うように板碑＝石塔婆に込めたこれらの主尊群の頂点の一つが双円性海塔板碑のようにも見える。今春の石巻市博物館企画展で「牡鹿・桃生両郡の境目」としたこの地域は、紀年銘では文応元（1260）年銘板碑の造立以来、質量ともに板碑の大規模造立地帯であり、一大仏教文化圏であったが、それを支えたのは、牡鹿湊と三陸南部沿岸交通・廻船とも連動する北上川舟運の結節区域における丘陵縁辺と自然堤防への集住、そして有徳人的階層の成長、山内首藤氏、長江氏、葛西氏領における緩やかな連帯などがあったのではないだろうか。また、南北朝から室町期においては北上川下流域の多福院の前身寺院、高福寺、篦峯寺の天台宗ネットワークが認められることから、これらが独自の「アビラウンケン」タイプ創出に関与している可能性もある。双円性海塔板碑は、宮城県域の傾向として交通・運輸の要衝に形成された有力者を対象に各宗派の板碑造立の展開が競い合うような場に数少ないながら造立された高度な密教的儀軌を有する僧と製作技術者を必要とした板碑ではなかったかと考えておきたい。

初例の高崎市・Ｓ家と天蓋・蓮座で荘厳された石巻市・長泉院例の偈「光明遍照／十方世界／念佛衆生／摂取不捨」（『観無量寿経』）の存在[77]は仙台市・郡山地区における初期造立が念仏結集板碑の集中造立期の中で行われたことなども考慮すれば、鎌倉末期から南北朝期を通じて密教のみならず浄土教的要素も強く保有していることにも留意したい。新義真言教学を大成した頼瑜が「劣慧の衆生」の自覚から阿弥陀如来の浄土往生を希求していたことも指摘されていることが想起される[78]。

本県の板碑の多くは天台宗寺院が多いなどの地域性と密教的要素が強く、浄土教的要素を併せ持つ台密的傾向が強いとされる[79]。一方、双円性海塔については思想の系譜から真言宗的要素が強調されるが、台密・東密両者の交流を考慮すれば、判然とせず、今後の課題である[80]。その造立が少数にとどまったことの理由は、本来、その思想が「甚祕ノ相傳」（『了因決』）的要素が強く、造立システムが限られた集団に保持されていたことや実作技術の困難さなどが挙げられる。

なお、本県においては、五大種子を内包した線刻五輪塔板碑が至徳４（1387）年銘石巻市・多福院の板碑で終了するのに対し、双円性海塔を主尊とする板碑は数少ないながら室町期にも造立され、紀年銘ではサ種子の下に配された応永23（1416）年銘登米市・桜岡今泉の板碑を最

後とする。全国的にみれば本来の趣旨を失ってもさらに近代まで（齋藤彦松氏前掲論文）[81]散発的に石塔として造立されるのは、そのデザインからくる呪力性もあったのではなかろうか。仙台市諏訪神社・古峯神社例が北目城の南端両コーナーを抑えたという伝承や登米市不動寺跡例が高清水城の南端に位置、あるいは群馬県高崎市の板碑が室町・戦国期の館の間で保護され続けたのも戦国期人に抱かせた呪力性故かもしれない。

本稿で取り上げた群馬県と福島県の事例との関係について、佐藤信行氏が指摘した群馬県から福島県（郡山市）を経由して双円性海塔板碑が伝播したとする説[82]は、魅力的な説であるが、群馬県高崎市の事例が大日法身真言、福島県の事例が大日報身真言であり仙台市古峯神社例がそれと形態の異なる大日報身真言の組合せであることからすれば単純な伝播ルートとは捉えられない。

また、野村隆氏は東密頼瑜の「双円大事口決」の思想及び「双円性海決」が載る了恵『了因決』（建武２（1335）年）にみられる長楽寺真言院から伝授された東密頼瑜説に台密の「男女赤白二滴の和合」解釈を加えた思想が上州や奥州への双円性海塔板碑造立の伝播を促したと示唆している[83]。しかし、前者の男女の性的合一により金胎合一を説く言説は、当時の密教や禅宗で広く共有されている[84]。後者の了恵については、長楽寺（群馬県太田市世良田）の西方約22kmに位置する宿大類町の板碑は正応５（1292）年銘であり了恵の『了因決』より年代的に先行する。したがって単純な因果関係とはならない。長楽寺は鎌倉期には関東随一の禅林とされる臨済禅寺であり、田中貴子氏によれば前述の了恵の『了因決』は長楽寺で了義が書写したもので、了義はそこで『渓嵐拾葉集』（1348年頃完成※田中貴子[85]）も書写している。長楽寺は天台教学を含め学ぶことができる「関東僧の一拠点」であり、師匠による「伝授」も行われていたという[86]。長楽寺から西方の富岡の貞治３（1364）年碑まで約20kmの利根川水系にあり、支院などを通じた情報共有は容易な立地ではある。

『渓嵐拾葉集』の「雙圓性海事」に掲載される画像（29図）は「性圓塔圖」と呼ばれているが、実作例からみれば稚拙な「アバランカンケン」タイプであり、実際の造立された板碑の主尊図像とは大きく異なっており、そのまま板碑の製作に使えるようなものではない。利根川水系の長楽寺と双円性海塔板碑の２例については単純な因果関係とは言えない。ただし、鎌倉末期に利根川水系の宿大類町や富岡の地に一時的に双円性海塔板碑の製作集団が入り、立塔し、その思想は南北朝期にかけて成熟していった可能性はあろう。しかし、限られた人脈の人々による掛図などの礼拝は行われても、板碑として造立するための高度な板碑実作技術者を派遣するシステムは構築されることはなく、大きな造立の展開をみることはなかったと考えられる。注目される頼瑜の系統の奥州布教については検討することができず、課題となる。

また、郡山市域で発掘された街場である荒井猫田遺跡[87]を阿武隈川東岸沿いに10km程北上する道を想定すると双円性海塔板碑の立つ関根の地に至る。鎌倉時代の安積郡を領有した伊東氏の領域は真言宗と強い結びつきを持っていたとされ[88]、阿武隈川を介して近接する田村郡の関根周辺もその影響を受けたことは十分考えられる。また、鎌倉末期の安積領は北条氏得宗化していたとされる[89]。しかし、関根の双円性海塔板碑は全く同じ形態例を見出せない初期の「アビラウンケン」タイプであり、独自の造形である。したがって、東北との関係については、双円性海塔を主尊とする板碑造立の初発地域として群馬県南西部が宮城県仙台平野と情報の交流があり、福島県郡山市の関根はその伝達ルートの一つの可能性はあるものの、いずれも鎌倉末期には北条氏領もしくは強い影響を受けた地域という共通性を持ちつつ、それぞれの地域での展開があったと見ておきたい。ただし、大きく見ると群馬県利根川流域の鎌倉後期の宿大類町例と南北朝期の富岡・龍光寺例の像容の大きな変化は、鎌倉末期の宮城県における仙台市・諏訪神社例と室町初期の多福院例間の像容の大きな変化に対応しているともいえる。両者間に

は何らかの情報共有があったともみられる。それは密教勢力間のネットワークであった可能性がある。

齋藤彦松氏は「真言宗系では五輪塔形の中に梵字大日五字真言を向合わせに表現し、天台宗系では梵字大日五字真言を向合わせに表現し、その梵字を五輪塔形に組み合わせている」とした[90]。板碑以外の石造物に眼を向ければ、13世紀後半と推定されている熊本市円台寺跡の双円性海塔を刻んだ五輪塔について前川清一氏は「真言宗の流れ」（東密）として、やや遅れて玉名市の青木磨崖梵字群を「天台宗の流れ」（台密）[91]として紹介した。両宗教勢力の独自の石造物形態を通して活発な競合と展開を窺うことができる。さらに双円性海塔は齋藤彦松氏が紹介しているように性海寺の絹本や滋賀県・竹生島宝厳寺の紙幅の例がある。また、高崎市の北西約100km、修験で知られる新潟県の妙高山の里宮である関山神社の仏足石の脇侍とされている「舎利塔」（新潟県指定時の用語）は、「宝塔」として鎌倉後期説もある[92]。写真を見た限りでは、下部は梵字ア・バを背中合わせに組合せているが、上部は「宝塔」として装飾化された姿であり、全体としては宝塔を意識しており、本稿紹介例とは系統は異なるものの関連性が注目される。

「双円性海塔」の思想が高野山や醍醐寺、比叡山などで育まれたとすれば、本稿で紹介した東日本の板碑例は、その石造物における１パターンである。各地で素材を越えた総合的な調査が実施されれば、類例は飛躍的に増え、その実態が解明される契機となることが期待される。

おわりに

フィールドを内陸に移すにつれ、なぜか「旧墓は処分しました」といわれる場面に出会い、板碑の消滅に愕然とすることが多くなった。本稿に紹介した登米市・今泉の１基もその例である。

鎌倉末期に北遷御家人といわれる武士たちが、現世と来世の幸福を願って板碑造立の波を創り、南北朝・室町期と在地文化や列島の宗教ネットワークと交流しながら奥州独自の板碑文化遺産を産み出したが、宮城県下での研究は未だ道遠しの感が否めない。今後とも石造物の様態や動向から奥州の中世社会を探る試みを体力の許す限り続けたいと思う。なお、本稿で紹介した双円性海塔板碑は群馬県、郡山市ではいずれも文化財として指定・保護されているが、本県では指定されている双円性海塔板碑は皆無であり、板碑全体の指定・保護も各市町村の報告書がほぼそろった現在においても極めて不十分な状況である。国民の貴重な歴史文化遺産として早急なる文化財指定と保護を切に望む。

末筆になりますが、群馬県の事例調査については「科学研究費補助金基盤研究（A）「デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究」（研究代表者：菊地大樹）」の助成をいただきましたことに感謝致します。

また、下記の皆様及び板碑の所有・管理者、助力をいただいた方々に厚く感謝致します（敬称略）。菊地大樹、七海雅人、末木文美士、長岡龍作、佐藤信行、泉田邦彦、野口達郎、菅原研州、高橋博志、水澤幸一、原田昭一、横山勝栄、日野智、渡辺雅子、橋本康男、古宮和典、関伸一、神宮良弘、小野寺良一、齋藤右一郎、島陰恒夫、郡山市文化振興課、群馬県文化財保護課、高崎市・文化財保護課、富岡市・文化財保護課、栗原市・文化財保護課

注（著作物刊行年の「年」は略）

1　企画展終了後には触発された市民からの発見通報や共同調査などの活動が発信されており、注目される（石巻市博物館（@icm_gakugei）さん／X（twitter.com））。

2　斎藤彦松氏は「雙円性海塔信仰の研究」『大谷大学における第26回〔日本印度学仏教学会〕学術大会紀要１』（日本印度学仏教学会　1975）において「大日五字真言（五輪種子）を向合せたる五輪塔（塔婆）を雙円性海塔（性円塔）とすることは「渓嵐拾葉集」に（略）「此等皆五輪種子」向合出タル塔婆也」と明記し更に向合せ塔婆図を掲出していることにより明

らか」としている。『溪嵐拾葉集』（光宗　1318・1348序）ではこの文の前段に「雙圓性海事　法華開題（※空海）云私苗　雙圓性海。常談四曼自性。重如月殿鎭説ク三密自樂ヲ。」（SAT より）とある。双円性海塔についてまとまった文献としては野村隆「双円性海塔私考」『史迹と美術』（史迹美術同攷会　1999）がある。

3　永見秀徳氏（九州文化財計測支援集団　代表）よりご教示いただいた Agisoft Metashape 及び CloudCompare による。

4　斎藤彦松「雙円性海塔信仰の研究」『大谷大学における第26回〔日本印度学仏教学会〕学術大会紀要１』（日本印度学仏教学会　1975）の定義から

5　菊地大樹「中世東国文化伝播論再考」『寺社と社会の接点』（高志書院　2021）では石巻市須江の西雲寺（東南0.8km の皮剥地区から移設）112号板碑について双円性海塔板碑としたが、断片のため確定できていない。また、高福寺奥の院205号板碑については剥落が顕著であるが、梵字真言「アンバランカンケン」は組み合わされていない。

6　佐藤信行「梵字変形五輪塔所刻の板碑―宮城県大和町玉ヶ池板碑を中心に」『宮城考古学19』宮城県考古学会　2017

7　佐藤信行「線刻五輪塔板碑―宮城県内の線刻塔形板碑を中心に」『宮城考古学22』宮城県考古学会　2020

8　菊地大樹「中世東国文化伝播論再考―東北からの照射」菊地大樹・近藤祐介『寺社と社会の接点　東国の中世から探る』高志書院　2021

9　名称、法量などは、『仙台市史　特別編５　板碑』（仙台市　1998）に準拠する。ただし、「諏訪社」を現在の名称「諏訪神社」及び「３号碑」を№３と表現。

10　龍泉Ⅲ　Amebaブログ「石碑の文字を読みたい！（CloudCompare を使った一例）」『歩け　あるけおろじぃ』2021

11　石黒伸一朗「仙台市と多賀城市の結衆板碑」『中世奥羽と板碑の世界』高志書院　2001

12　『仙台市史　特別編５　板碑』仙台市　1998

13　法量、概要は河南町域の板碑の基本的文献である佐藤雄一『河南町の板碑』（2015）に準じる。

14　斎藤右一郎氏教示。勝倉元吉郎『桃生・山内首藤氏と板碑』桃生町教育委員会　1999

15　菊地大樹「中世東国文化伝播論再考―東北からの照射」『寺社と社会の接点　東国の中世から探る』高志書院　2021

16　『仙台市史　特別編９　地域誌』仙台市　2014

17　石黒伸一朗「仙台市と多賀城市の結衆板碑」『中世奥羽と板碑の世界』高志書院　2001

18　大石直正「板碑にみる中世奥羽の世界」『中世奥羽と板碑の世界』高志書院　2001

19　佐藤雄一『河南町の板碑』（2015）参照。踏査により板碑１基を加えた。法量は『河南町の板碑』による。

20　大同二（807）年創建とするのは『河南町誌』河南町（1967）及び『河南町史　上巻』宮城県河南町　2005『宮城県寺院大総覧』（宮城県寺院総覧編纂会　1975）では延暦中とする。

21　『石巻の歴史　第八巻』石巻市　1992

22　『石巻の歴史　第一巻』石巻市　1996

23　多福院の前身寺院は日輪寺であり、板碑の運ばれた草刈山の板碑には「安養寺」銘が確認されている。『石巻の歴史　第七巻　資料編１　考古編』石巻の歴史　1995

24　勝倉元吉郎「石巻市多福院及びその周辺板碑群」『歴史考古学第29号』歴史考古学研究会　1991

25　佐藤雄一『河南町の板碑』（2015）参照。踏査により板碑１基を加えた。

26　旧河北町・北上町域の板碑・近世塔悉皆調査報告書である勝倉元吉郎他『北上川下流域のいしぶみ』（宮城県桃生郡河北地区教育委員会　1994）では、板碑群番号は振られていないが、掲載順に№３とした。法量は同書による。

27　注14及び菊地大樹・上椙英之『宮城県石巻市東福田板碑群調査報告書』東京大学史料編纂所　2022
『板碑群調査報告』桃生郡河北地区教育委員会　1982

28　中村光一「宮城県北部の板碑天蓋について―北上川下流域を中心に―」『石巻文化センター調査研究報告２』1993

29　『古川の板碑』古川市教育委員会　1884

30　白根靖大『室町幕府と東北の国人』2015

31　概要・法量は主として『石巻の歴史　第八巻』（石巻市　1992）による。

32　勝倉元吉郎「石巻市多福院及び周辺板碑群」『歴史考古学29』（歴史考古学研究会　1991）によれば、板碑群中に「當寺」銘が２基あり、日輪寺の開山を観応２（1351）年頃と推定している。また、阿弥陀峯の聖域はそれ以前から存在し、牧山関係僧の墓域となり、「密教弥陀信仰」を示す板碑が立てられていたとする。

33　『米山町史』米山町　1974

34　佐藤正人「中世霊場高清水善光寺―栗原郡高清水善光寺の世界を復元する」『六軒丁中世史研究８,』2001

35　佐藤正人「中世霊場高清水善光寺―栗原郡高清水善光寺の世界を復元する」『六軒丁中世史研究８,』2001
36　佐藤正人「中世霊場高清水善光寺―栗原郡高清水善光寺の世界を復元する」『六軒丁中世史研究８,』2001
37　「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書４』宮城県教育委員会　1980
38　佐藤正人「中世霊場高清水善光寺―栗原郡高清水善光寺の世界を復元する」『六軒丁中世史研究８,』2001
39　松本郁代「中宮御産と密教：『宝秘記』尊星王法御修法をめぐって」名古屋大学グローバルＣＯＥプログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」第４回国際研究集会　2008
40　斎藤彦松「雙円性海塔信仰の研究」『大谷大学における第26回〔日本印度学仏教学会〕学術大会紀要１』日本印度学仏教学会　1975
　同「参考要記」プリントs.p.№042　1975
41　田中正能『郡山市の石造供養塔』（郡山市教育委員会　1970）では「板碑による中世の道路の復元」の項があり、北小泉から岩角方面の道に属する。また、板碑の図像を「ア、バン、ラン、ウン、カン」の図案化とし、銘文については「「嘉」とのみ読める」とし嘉元と推定している。文献については野口達郎氏より提供いただいた。
42　『郡山東部Ⅲ　穴沢地区遺跡』郡山市教育委員会　1983
　『福島県の地名』平凡社　1993
43　三宅宗議「南奥の板碑　概要」大石直正・川崎利夫『中世奥羽と板碑の世界』高志書院　2001
44　『郡山の中世　板碑の世界』郡山市教育委員会(2014)では、銘文を５行認識し、左３行を「嘉元」／「仏」／「極楽」と読む。
45　『新編高崎市史　資料編３中世１』高崎市　1996
46　『新編高崎市史　通史編２中世』高崎市　2000
　諏訪神社については近藤義雄氏、板碑については磯部淳一氏が執筆している。
47　『群馬県の地名』平凡社　1997　「とみおかこども園ＨＰ」などによる。
48　『群馬県史３　中世』群馬県　1989
49　鈴木規夫「木製漆塗彩色金銅種子装五輪塔（性海双円塔）」『國華　1188』國華社　1994
　愛甲昇寛「稲沢市性海の五輪塔納入資料」『佛教藝術204』毎日新聞出版　1992
50　内藤栄『舎利荘厳美術の研究』青史出版　2010
51　小川豊生『中世日本の神話・文字・身体』森話社　2014
52　『日本仏教史辞典』吉川弘文館　1999
53　「雙圓大事口決」『密教大辞典』法蔵館　1979
54　関悠倫「近代の真言密教における『釈摩訶衍論』観の問題」『智山学報83』2020
55　野村隆「双円性海塔私考」『史迹と美術』（史迹美術同攷会　1999）では頼瑜の「双円大事口決」（文応２（1261）年）の「金胎不二二バンの合体」の思想が抱き合わせ五輪塔となったとする。
56ａ．斎藤彦松「雙圓性海塔信仰の研究」『大谷大学における第26回〔日本印度学仏教学会〕学術大会紀要１』日本印度学仏教学会　1975
　同「参考要記」プリントs.p.№042　1975
　ｂ．菊地大樹「主尊の変容と板碑の身体」藤澤典彦『石造物の研究』高志書院　2011
57　勝倉元吉郎他『北上川下流域のいしぶみ』（宮城県桃生郡河北地区教育委員会　1994）では、「双円性海塔」の項を設けて、同様の宮城県域の傾向を指摘している。
58　菊地大樹「主尊の変容と板碑の身体」藤澤典彦『石造物の研究』（高志書院　2011）では金胎不二思想が理智事三点説へと展開する中で如意宝珠信仰と結びついていった具体例とする。
59　大石直正「板碑にみる中世の仙台平野の地域区分とその背景」『市史せんだい８』仙台市　1998
60　田中則和「陸奥国「国府域」の考古学的様相」柳原敏昭・飯村均『鎌倉・室町時代の奥州』高志書院　2002　『王ノ壇遺跡』仙台市教育委員会　2000
61　田中則和「多賀国府の変容」小野正敏・萩原三雄『鎌倉時代の考古学』高志書院　2006
62　佐川正敏・藤原二郎「栗原市高清水「仰ヶ返り地蔵前前遺跡」の調査研究Ⅲ―鎌倉時代日本最北の瓦窯跡の構造の解明」『東北学院大学東北文化研究所紀要40』2008
63　佐藤正人「中世霊場高清水善光寺―栗原郡高清水善光寺の世界を復元する」『六軒丁中世史研究８,』2001
64　田中則和「陸奥国「国府域」の考古学的様相」柳原敏昭・飯村均『鎌倉・室町時代の奥州』高志書院　2002
　同「王ノ壇遺跡」『仙台市史　特別編　城館』仙台市　2006
65　小川豊生『中世日本の神話・文字・身体』（森話社　2014）では、円形を成す「二つの鑁字」の形こそが「双円性海」とする文観（真言宗　1278～1357）の思想

を紹介している。

66　菊地大樹「中世東国文化伝播論再考―東北からの照射」『寺社と社会の接点　東国の中世から探る』高志書院　2021　長江氏の本拠地の東松島市大塩には新山神社など荘厳を極めた板碑が多数存在することで著名である（注15）。

67　伊藤清郎「南北朝・室町期の葛西氏」『石巻の歴史　第六巻』石巻市　1992

68　小峰智行『梵字集』理文出版　2021

69　「上品山」『宮城県の地名』平凡社　1987

70　「■応二（1260）年庚申　平朝臣資信」銘の宮城県最古の断碑を所蔵する上品山高徳寺の由緒は坂上田村麿が上品阿弥陀如来を勧請して上品熊野三所大権現と称したとする。後に平清盛末流の平朝臣資信（板碑と同名）が東奥に下り、子孫が上品山熊野権現を祀ったとする弘治元（1555）年の縁起を伝える（『河北町史　下』）。『宮城県寺院大総覧』（1975）では、元地を三輪田竹迫とする。大石直正氏は持渡津先達の候補地として高徳寺所在地の「持領」を挙げる（『中世北方の政治と社会』校倉書房　2010）。熊野社の別当が上品寺であった可能性はないであろうか。

71　前川清一「肥後円台寺跡周辺出土した「雙圓性海塔」の復元について」熊本博物館館報．2013年度（26）2014　文献の存在は野口達郎氏のご教示による。

72　戦国期、禅宗における双円性海塔板碑の様態を福岡県柳川市域にあった延徳２年銘逆修板碑を素材として「柳河明証図絵」（近世）から考察した論文に木下浩良氏の「「柳河明証図絵に描かれた延徳２年五輪塔板碑」『九州考古学93』（2018）がある。双円性海塔の中に「王峰禅師寿位」と刻むもので本来の姿から遠い姿である。中世後期における禅宗の双円性海塔を取り込む動きの例とすれば興味深い。この例については野口達郎氏よりご教示いただいた。

73　佐藤信行「梵字変形五輪塔所刻の板碑―宮城県大和町玉ヶ池板碑を中心に」『宮城考古学19』宮城県考古学会　2017

74　福岡県田川市安養寺跡の板碑　斎藤彦松「雙圓性海塔信仰の研究」『大谷大学における第26回〔日本印度学仏教学会〕学術大会紀要１』日本印度学仏教学会　1975

同「参考要記」プリントs.p.№042　1975

野村隆「「西国の石造美術三題」『史迹と美術724』2002

75　「上野武士の浮沈」『図説　群馬県の歴史』河出書房新社　1989

76　佐藤信行「線刻五輪塔板碑：宮城県内の線刻塔形板碑を中心に」『宮城考古学22』宮城県考古学会　2020

77　菊地大樹「主尊の変容と板碑の身体」藤澤典彦『石造物の研究』（高志書院　2011）では双円性海塔を含む金胎不二思想が理知事三点説と展開する中で宝珠信仰と結びつき阿弥陀如来信仰が関わる例として紹介されている。

78　小林康典「新義教学―頼瑜とその周辺」『鎌倉仏教―密教の視点から』大蔵出版　2023

79　大石直正「仙台市の板碑」『仙台市史　特別編５　板碑』仙台市　1998

80　菊地大樹氏は注56ｂにおいて「双円性海塔」について東密小野流で重視されたとするも天台系の聖教にも現れるとしている。

81　近世ころと思われる和歌山県根来寺の石塔の事例を伊藤宏之氏からご教示いただいた。

82　佐藤信行「線刻五輪塔板碑―宮城県内の線刻塔形板碑を中心に」『宮城考古学22』宮城県考古学会　2020

83　野村隆「双円性海塔私考」『史迹と美術』史迹美術同攷会　1999

84　末木文美士「仏教と身体性」『禅の中世　仏教史の再構築』臨川書院　2022

85　田中貴子『『溪嵐拾葉集』の世界』名古屋大学出版会　2003

86　田中貴子「『溪嵐拾葉集』関東所伝本の性格：関東寺院に於る享受をめぐって」『国文学攷112』広島大学国語国文学会　1986

87　『埋もれていた中世の町　荒井猫田遺跡』郡山市教育委員会　2009

88　高橋明「荒井猫田遺跡の可能性」藤原良章・飯村均『中世の宿と町』高志書院　2007

89　『郡山市史　第１巻　原始・古代・中世』1975

90　斎藤彦松「雙圓性海塔信仰の研究」『大谷大学における第26回〔日本印度学仏教学会〕学術大会紀要１』日本印度学仏教学会　1975

91　前川清一「肥後円台寺跡周辺出土した「雙圓性海塔」の復元について」熊本博物館館報．2013年度（26）2014　青木磨崖梵字群に刻まれた双円性海塔について原田昭一氏は『九州板碑の考古学』（高志書院　2020）において天台系修験との深い関わりを指摘していることは注目される。

92　水澤幸一「関山神社仏足石」『日本石造物辞典』（吉川弘文館　2012）

川勝政太郎『日本石造美術辞典』（東京堂出版　1978）では「梵字らしいもので宝塔形を作る」として様式的に鎌倉末期とする。